

番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
<b>オペラ</b>			
アレーナ・ディ・ヴェローナ2019「ドミンゴ50周年オペラ・ガラ」	2,2,11,11,17	デビュー50周年を迎えたオペラ界のスーパースター、ブラシド・ドミンゴ、ヴェルディ・バリトンとしての現在位置を示す、貴祿のアニヴァーサリー・ガラ！	<p>古代ローマ時代の円形闘技場の遺跡で行なわれるアレーナ・ディ・ヴェローナ音楽祭。ヨーロッパの夏の音楽祭のなかでもひととき高い人気を誇るこの野外音楽祭で2019年8月、ブラシド・ドミンゴの同音楽祭デビュー50周年を記念するガラ公演が開催されました。主役はもちろんドミンゴ自身。ジェゼッパ・ヴェルディの3つのオペラによるスペシャル・プログラムの模様をたっぷりお届けします。</p> <p>ドミンゴのアレーナ・ディ・ヴェローナ初登場は1969年7月。ビルギット・ニコルソンと共演した『トゥーランドット』のカラフ役でした。ドミンゴは当時28歳。すぐ翌月には『ドン・カルロ』の題名役を、こちらはピエロ・カップッチリ、モンセラート・カバリエ、フィオレンツァ・コソツットらと共演しています。</p> <p>さらにさかのぼると、ドミンゴのオペラ・デビューは1959年、18歳のときにメキシコ国立劇場で歌った『リゴレット』の小さな役（ボルサ）でした。1961年にはやはりメキシコ・シティのマリア・テレサ・モンターヤ劇場の『椿姫』でアルフレードを歌って主役デビューも果たしていますが、真に偉大なテノール歌手としてのキャリアが始まるのは、1960年代末から70年代にかけてのことです。1967年にウィーン国立歌劇場（ドン・カルロ）でセンセーショナルなデビューを飾ると、1968年メトロポリタン歌劇場（アドリアーナ・ルグヴァール）、1969年ミラノ・スカラ座（エルナーニ）、1971年英国ロイヤル・オペラ（トスカ）など、世界の著名劇場に次々とデビューを果たします。アレーナへの初登場もまさにそんな時期。期待の新星テノールの登場でした。</p> <p>その後も次々とアレーナに出演を重ねたドミンゴですが、歌手としてだけでなく、『カルメン』や『アイダ』では指揮者としても出演。とくに1994年には、テノール歌手として『オテロ』を演じ、『アイダ』を指揮して同一シーズンに二刀流での登場を果たしています。また2013年にも、バリトン歌手として『ナブッコ』を歌い、再び『アイダ』を指揮したのに加えて、自身がプロデュースするオペラ歌手コンクール「オペラリア」のガラ・コンサートも開催するなど、アレーナには音楽家ドミンゴのすべての形態が詰まっています。</p> <p>記念すべきデビュー50周年公演にドミンゴが選んだのは、『ナブッコ』『マクベス』『シモン・ボッカネグラ』のヴェルディの3作品。いずれもバリトンが主役の、いわばドミンゴの現在位置を示す演目です。それぞれの題名役の活躍シーンを中心にした抜粋上演ながら、もちろんコンサート形式ではなく、近年のアレーナ・ディ・ヴェローナではおなじみのCG映像なども駆使した舞台美術や衣装もつけての舞台形式での上演です。</p> <p>『ナブッコ』では「ユダの神よ」（第4幕）、『マクベス』では「慈悲、尊敬、愛」（第4幕）の名アリアを、一方、いわゆるアリアらしいアリアが与えられていない『シモン・ボッカネグラ』では第2幕フィナーレのアメーリア、カプリエーレとの三重唱や第3幕のフィエスコとの二重唱の聴かせどころを、たっぷり楽しむことができます。その説得力ある歌いぶりを見ているかぎり、このとき78歳という年齢など忘れてしまうはずです。</p> <p>なお『マクベス』では、現行版（1865年パリ初演）をベースにしつつ、フィナーレの合唱の前に初演版（1847年フリンツェ初演）の終曲だったマクベスの臨終のモノローグを挿入しています。マクベスが、つまりドミンゴがすべての主役であるこの公演には、とてもふさわしいチョイスと言えるでしょう。実際ドミンゴの見事な歌のドラマが深い感動を呼び起します。</p> <p>カーテンコールでは、背景に「50 DOMINGO」の文字が炎で浮かび上がるなか、歌手や合唱団、指揮者・演出家ら全員の手拍子を迎えられて主役ドミンゴが登場。満場の喝采を浴びる様子はまさにオペラの帝王の趣です。</p> <p>【演目】ジェゼッパ・ヴェルディ：歌劇『ナブッコ』（序曲、第3幕抜粋、第4幕）歌劇『マクベス』第4幕歌劇『シモン・ボッカネグラ』（第2、3幕抜粋）【指揮】ジョルディ・ベルナセル【演奏】アレーナ・ディ・ヴェローナ管弦楽団・合唱団・バレエ団（合唱指揮＝ヴィート・ロンバルディ）</p> <p>【出演】『ナブッコ』ブラシド・ドミンゴ（ナブッコ／バリトン）アンナ・ピロツィ（アビガイル／ソプラノ）マルコ・ミカ（ザッカリヤ／バス・バリトン）ジェラルディーヌ・ショヴェ（フェネラ／メゾ・ソプラノ）アルトゥーロ・チャコン＝クルス（イズマエーレ／テノール）エリザベッタ・ジッツォ（アンナ／ソプラノ）ロマーノ・ダル・ゾーヴォ（バール神の大司祭／バス）カルロ・ポーゼ（アブダロ／テノール）『マクベス』ブラシド・ドミンゴ（マクベス／バリトン）アンナ・ピロツィ（マクベス夫人／ソプラノ）アルトゥーロ・チャコン＝クルス（マクダフ／テノール）カルロ・ポーゼ（マルコム／テノール）ロマーノ・ダル・ゾーヴォ（医者／バス）ローレ・ガルシア（侍女／メゾ・ソプラノ）『シモン・ボッカネグラ』ブラシド・ドミンゴ（シモン・ボッカネグラ／バリトン）アンナ・ピロツィ（アメーリア・グリマルディ／ソプラノ）マルコ・ミカ（ヤコボ・フィエスコ／バス・バリトン）アルトゥーロ・チャコン＝クルス（カプリエーレ）リチャード・そして世界の主要歌劇場で国際的に活躍する名バリトン、カルロス・アルバレス。愛と復讐に翻弄される兄、妹、その恋人のドラマティックな人間ドラマを重厚な音楽で支えるのは、この作品を得意とする巨匠ズービン・メータ。</p> <p>【出演】ニーナ・シュテンメ（レオノーラ／ソプラノ）サルヴァトーレ・リチートラ（ドン・アルヴァーロ／テノール）カルロス・アルバレス（ドン・カルロ／バリトン）ナディア・クラステヴァ（フレツィオジラ／メゾ・ソプラノ）アラスティア・マイルズ（カラトラヴァ侯爵&amp;グアルデアノ神父／バス）ティツィアーノ・ブラッチ（フー・メリーネ／バリトン）エリザベータ・マリン（ケラ／メゾ・ソプラノ）ダン・パウル・ドミトレスク（市長／バス）ヒヤエル・ロイター（マストロ・トラブコ／テノール）クレメンス・ウンターライナー（軍医／テノール）ウィーン国立歌劇場バレエ&amp;ウィーン・フォルクスオーパー・バレエ、ウィーン国立歌劇場バレエ学校の生徒たち</p> <p>【演目】ジェゼッパ・ヴェルディ：4幕のメロドラマ『運命の力』【台本】フランチェスコ・マリア・ピアヴェ（初版）アントニオ・ギスランツォニ（改訂版）【原作】リバス公アンヘル・デ・サーベドラの戯曲【ドン・アルバーロ、または運命の力】及びアリードヒ・フォン・シラーの戯曲『ヴァレンシュタインの陣営』（アンドレア・マッペイ伊語訳）からの一場面</p> <p>【演出】デイヴィッド・パウンドニー【装置 &amp; 衣装】リチャード・ハドソン【照明】ファブリス・ケブル【振付】バエーテ・フォラック【指揮】ズービン・メータ【演奏】ウィーン国立歌劇場管弦楽団 &amp; 同合唱団、ウィーン国立歌劇場舞台上オーケストラ【合唱指揮】トーマス・ラング【収録】2008年3月1日ウィーン国立歌劇場【映像監督】カーリーナ・フィビヒ ■ 字幕 / 全4幕 / 約2時間44分</p>
ウィーン国立歌劇場2008『運命の力』	10,10,14,14,26,26	当代随一のドリーム・キャストが結集！2008年にウィーン国立歌劇場で新制作され、そのクライティの高さで大喝采を浴びた公演。	<p>【演目】ジェゼッパ・ヴェルディ：4幕のメロドラマ『運命の力』【台本】フランチェスコ・マリア・ピアヴェ（初版）アントニオ・ギスランツォニ（改訂版）【原作】リバス公アンヘル・デ・サーベドラの戯曲【ドン・アルバーロ、または運命の力】及びアリードヒ・フォン・シラーの戯曲『ヴァレンシュタインの陣営』（アンドレア・マッペイ伊語訳）からの一場面</p> <p>【演出】デイヴィッド・パウンドニー【装置 &amp; 衣装】リチャード・ハドソン【照明】ファブリス・ケブル【振付】バエーテ・フォラック【指揮】ズービン・メータ【演奏】ウィーン国立歌劇場管弦楽団 &amp; 同合唱団、ウィーン国立歌劇場舞台上オーケストラ【合唱指揮】トーマス・ラング【収録】2008年3月1日ウィーン国立歌劇場【映像監督】カーリーナ・フィビヒ ■ 字幕 / 全4幕 / 約2時間44分</p>

番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
エクサンプロヴァンス音楽祭2019『トスカ』	5,5,8,8 ,21,21, 30,30	1986年年末に上演されたミュンヘン・オペラのプロダクション。カルロス・クライバーが颯爽と登場する序曲から躍動するワルツにのせて、息もつかせず最後まで見入ってしまう空前絶後の名演。	<p>新型コロナウイルス感染症拡大防止のために、2020年の夏は残念ながら開催中止となったフランスのエクサンプロヴァンス音楽祭。1948年に始まったこの音楽祭は、とくに近年、独創的で斬新な演出のオペラが上演されて、毎年大きな話題を呼んでいます。2019年、演出家のビエール・アウディが新総監督に就任したリジーヌに上演されたジャコモ・プッチーニの歌劇『トスカ』は、その極め付き。破天荒な解釈が話題を醸しました。演出を手がけたのはフランスの映画監督クリストフ・オム。わたしたちにとっては、フランス国立リジーネ歌劇場での大野和士とのコラボレーションでもの名を記憶している気鋭のクリエイターです。独自のコンセプトで賞かれた上演の模様を、じっくりとご覧ください。</p> <p>オペラが始まると、最初に聴こえてくるのは、なんと第2幕の有名なアリア『歌に生き恋に生き』です。それはコードから流れる音楽。年老いた往年の大プリマ・ドンナが、かつての自分の録音と一緒に口ずさんで思い出に浸っているのです。しかしすぐに、彼女の息子がコードの針を上げて、プリマ・ドンナはわれに返ります。この日は彼女の屋敷にオペラ団のメンバーがやってくる、彼女の功績を称える演奏会形式の『トスカ』のリハーサルが行なわれることになっているのです。やがてオーケストラのチューニングが始まり、歌い手から合唱団まで、メンバーたちが次々と家に入ってきます。</p> <p>と、ここまでがいわゆる『アヴァン・タイトル』。プリマ・ドンナの「用意できたわ。あがごとく、マエストロ」という声とともに、プッチーニの音楽が始まります。しかし、『トスカ』本来の舞台である1800年のローマはまったく出てきません。第1幕はプリマ・ドンナ邸でのオペラのリハーサルの様子。この演出は、『トスカ』を上演する現代のオペラ団を描いた物語なのです。つまりトスカ役のエンジェル・ブルーは、トスカそのものではなく、「トスカ役を歌うソプラノ歌手」を演じています。これはもう「読み替え」どころではなく、プッチーニの音楽をそのまま使った別の音楽劇。その主役はトスカでもカヴァラドンでもなく、原作にない老プリマ・ドンナです。ところがこれがかつてなかなかありません。</p> <p>ブルーの演じるソプラノ歌手は、輝かしい声を持つカヴァラドン役のテノール歌手ジョゼフ・カレヤに好意を抱いているようです。ところがカレヤは生来のプレイボーイなのか、あるいは大物歌手の庇護を得ようとしているのか、盛んに老プリマ・ドンナの気を引くような態度をとるので、ブルーは気が気でなりません。カレヤがプリマ・ドンナの手にキスをすれば誤し、カレヤが自分のほうを向いて歌い出せば途端に満面の笑み。純情な少女なようなかわいらしい反応を繰り返します。一方のカレヤは、リハーサル中だというのに、片手にはずと酒のグラス。どうやらアルコール中毒の症状も出ているようです。プリマ・ドンナ役はキャサリン・マルファティーン。かつて実際にトスカ役でも大活躍した、上演時71歳の名ソプラノは、その役割とイメージが重なります。実際、劇中には、彼女が出演したロイヤル・オペラの『トスカ』のボスターや、フランシ・ドミンゴと共演した映画版『トスカ』の映像も使用されるなど、随所が実在のマルファティーンに当て書きした演出になっています。老プリマ・ドンナはすでに現役を引退して悠々自適の生活（なにするオペラのリハーサルができるほどの広い屋敷に住んでいるのです）。暮らしぶりは優雅に見えますが、彼女の心はいまもまだスポットライトに照らされた舞台上にあるようで、往年の栄光にすがるように、写真や舞台衣裳などの思い出の品々とともに毎日を送っています。しかし久しぶりにオペラの稽古に立ち会ったことで思い出と現実の区別がつかなくなったのか、彼女は少しずつ混乱し、精神に異常をきたして行きます。演出のオムは、ハリウッド映画『サンセット大通り』（1950年）にヒントを得たと語っています。老いて世間から忘れられた往年のスター女優ノーマ・デズモンドの妄執と狂気。この『トスカ』にも、映画とはちがう悲劇的な結末が待っています。</p> <p>音楽は（わずかな例外を除いて）プッチーニのスコアそのまま進み、第2幕はリハーサル終了後のプリマ・ドンナ邸、第3幕は演奏会形式のオペラ本番と、物語の舞台が変わっていきます。本来の『トスカ』のストーリーで理解しようとするなら、まったく意味不明な物語。実際、「作品に対する冒涇」という批判の声も少なくなく、これももしプッチーニの母国イタリアの音楽祭だったら、大ブーイングが起こったかもしれません。しかしエクサンプロヴァンスの客席は大喝采でこの衝撃作を歓迎しました。歌手陣は充実した歌唱を聴かせています。なかでもアメリカ人ソプラノのエンジェル・ブルーの、強く、しかし柔らかな声はとても魅力的。上述のような少女っぽい可愛い表情もじつにうまくなって印象的です。マリンスキー劇場を本拠に活躍するパトリック・アレクセイ・マルコフのスカルピオも圧巻。ときにじつにソフトな優しい歌声で、この悪役のいやらしさを際立たせています。オーケストラは首席指揮者ダニエル・ルステイオー率いるフランス国立リジーネ歌劇場管弦楽団。第3幕は演奏会形式上演という設定なので、オーケストラもピットからステージ上へ移動。イタリア三羽鳥ルステイオーのオペラ指揮姿をたっぴり見られるのも思わぬ副産物で、2017年に来日した東京二期会『トスカ』でも聴かせてくれた、コントラスト豊かで濃厚な表現の音楽作の一端をかいま見ることができます。また彼や奏者たちが、絶妙に演技に絡むのも見どころのひとつです。はたしてこれが、オペラ解釈の新たな地平を拓く勇気ある傑作舞台なのか、唾棄すべきオペラ史上最大級の異端なのか。ぜひご自身の目で確かめたい。</p> <p>貴族に対する庶民の勝利を生き生きと表現したモーツァルトのオペラ『フィガロの結婚』の物語は、リジーネの歌劇で知られる『セビリアの理髪師』の後日談。</p> <p>フィガロとスザナの結婚式。アルマヴィーヴァ伯爵の初夜権行使を阻止するため、フィガロたちは伯爵夫人と共に一計を案じるが…。</p> <p>東京フィルハーモニー交響楽団常任指揮者として日本でもおなじみのイスラエルダン・エッティンガーが、ザルツブルク音楽祭で初のオペラ指揮。ウィーン・フィルからエリクソンと情熱を引き出したと絶賛されました。パレンボイムの秘蔵っ子として、ベルリンではカペルマイスターも務めていた俊英で、この公演でも自らチェンバロを弾きながらウィーン・フィルを指揮。今後の活躍にも目が離せません。</p> <p>なめらかな声とモデル並みの容姿で大人気のベネズエラ人ソプラノ、パトリック・ルカ・ピザローニは今年まだ40歳。チューリッヒ歌劇場を拠点に古楽でも活躍中のソプラノ、マルティナー・ヤンクヴァー、まだ20代ながらザルツブルク音楽祭には2014年『ドン・ジョヴァンニ』に続いての出演となる美人ソプラノ、アネット・フリッチュ、ウィーン国立歌劇場を中心に活躍するアダム・プラチェツカ、そしてロシア出身の注目メゾ・ソプラノ、マルガリータ・グリシコヴァなど、今とときめくライジングスターたちが勢ぞろい。その若々しい歌声と素晴らしいアンサンブル、見た目もびっくりな容姿と演技を、ウィーン・フィルの美しいオーケストラと共に楽しみください。</p> <p>演出は、北欧出身の俳優でもあるスヴェン＝エリック・ベヒトルフ。丁寧なキャラクター作りは本公演でも健在。さらに2階建てのセットがドラマバラ喜劇を盛り上げます。最後のカーテンコールまでお見逃しなく。</p> <p>2015年音楽祭話題の公演が、クラシカ・ジャパンのみで、いち早く、字幕付でご覧いただけます。</p> <p>[出演]ルカ・ピザローニ (アルマヴィーヴァ伯爵/バス/パトリック) アネット・フリッチュ (伯爵夫人/ソプラノ) アダム・プラチェツカ (フィガロ/パトリック) マルティナー・ヤンクヴァー (スザナ/ソプラノ) マルガリータ・グリシコヴァ (ケルビーノ/メゾ・ソプラノ) アン・マレー (マルチェリーナ/メゾ・ソプラノ) カルロス・ジョーソン (ドン・パトリック/バス) パウル・シュヴァイネスター (ドン・バジリ/テノール) フランツ・ズッペー (ドン・クルシオ/テノール) クリステイナ・ガンシュ (バルバリーナ/ソプラノ) エリック・アンステイネ (アントニオ/バス)</p> <p>[演目]ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト：4幕のオペラ『フィガロの結婚』K.492[台本]ロレンツォ・ダ・ポンテ[原作]ビエール＝オキュスタン・カンド・ポー・マルシェの戯曲『たわけた一日、あるいはフィガロの結婚』</p> <p>[演出]スヴェン＝エリック・ベヒトルフ[装置]アレックス・イールズ[衣裳]マルク・ブーマン[照明]フレデリック・ロム[ドラマトルギー]ローニー・ディートリヒ</p> <p>[指揮]ダン・エッティンガー[演奏]ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団、ウィーン国立歌劇場合唱団[合唱指揮]エルンスト・ラッフェルスベルガー</p> <p>[収録]2015年8月9日ハウス・フォー・モーツァルト (ザルツブルク) 「ザルツブルク音楽祭2015」</p> <p>[映像監督]ティツィアーノ・マンチーニ</p> <p>■字幕/全4幕：約3時間33分</p>
ザルツブルク音楽祭2015『フィガロの結婚』	14,14,1 6,16,18 ,18,22, 22	モーツァルトの最高傑作のひとつ。『フィガロの結婚』の物語は、リジーネの歌劇で知られる『セビリアの理髪師』の後日談。	<p>柔軟でしなやかな音楽運びと振幅の大きなダイナミクス、そしてドラマティックなオーケストラ。これぞイタリア・オペラ！といえる最高の『ラ・ボエーム』映像。ラストは誰もが目撃するかどうかどうだろう。ダヴィデ・リヴエールモールの演出は、舞台背景に投影されるゴッホやルノワール、マネといった印象派絵画がオペラ初演の頃のバリの雰囲気を出し出し、その中で青春人間ドラマを描くもの。第2幕ムゼッタのアリアの独創的な演出はお見逃しなく。第3幕のアリユーゲルのような冬景色も美しい。</p> <p>イスラエル出身のソプラノ、ガム・ジェイムズ（ミミ）、ベネズエラのテノール、アレクシ・マチャド（ロドルフォ）、2013年ミラノ・スカラ座来日公演『アルスタッフ』でフォードを歌ったイタリアのパトリック、マッシモ・カヴァレツティ（マルチェロ）そして地元バレンシア出身のソプラノ、カレマン・ロメウ（ムゼッタ）など、今後の活躍が期待される国際色豊かな歌手たちも注目。2012年12月バレンシアのソフィア王妃芸術館公演。</p> <p>[出演]ガム・ジェイムズ (ミミ/ソプラノ) アレクシ・マチャド (ロドルフォ/テノール) マッシモ・カヴァレツティ (マルチェロ/パトリック) カレマン・ロメウ (ムゼッタ/メゾ・ソプラノ) ジャンルカ・ブラット (コッリーネ/バス) マチア・オリヴィエーリ (ジョナール/パトリック) マッテオ・ペイローネ (ペノワ/バス) アンドレア・ズナルスキ (アルチンドロ/バス) パブロ・ガルシア・ロベス (バルニョール/テノール) ボロ・キナー (関税官/バス)</p> <p>[演目]ジャコモ・プッチーニ：4幕のオペラ『ラ・ボエーム』[台本]ジュゼッペ・ジャコザ&amp;ルイーダ・イングリッパ[原作]アンリ・ミュルジエールの小説『ボヘミアンの生活風景』[演出・装置・衣裳・照明]ダヴィデ・リヴエールモール[指揮]リカルド・シャイ[演奏]バレンシア州立管弦楽団、バレンシア自治州合唱団、他[合唱指揮]フランセスク・ベラレス、ルイス・ガッリド、他[収録]2012年12月12日&amp;15日ソフィア王妃芸術館 (バレンシア)</p> <p>[映像監督]ミハエル・バイヤー</p> <p>■字幕/全4幕：約1時間56分</p>
シャイの『ラ・ボエーム』	14,14,1 6,16,18 ,18,22, 22	ミラノ・スカラ座次期音楽監督に決定したイタリアの指揮者リカルド・シャイが最高のオペラ指揮者であることがわかる番組。	柔軟でしなやかな音楽運びと振幅の大きなダイナミクス、そしてドラマティックなオーケストラ。これぞイタリア・オペラ！といえる最高の『ラ・ボエーム』映像。ラストは誰もが目撃するかどうかどうだろう。ダヴィデ・リヴエールモールの演出は、舞台背景に投影されるゴッホやルノワール、マネといった印象派絵画がオペラ初演の頃のバリの雰囲気を出し出し、その中で青春人間ドラマを描くもの。第2幕ムゼッタのアリアの独創的な演出はお見逃しなく。第3幕のアリユーゲルのような冬景色も美しい。 <p>イスラエル出身のソプラノ、ガム・ジェイムズ（ミミ）、ベネズエラのテノール、アレクシ・マチャド（ロドルフォ）、2013年ミラノ・スカラ座来日公演『アルスタッフ』でフォードを歌ったイタリアのパトリック、マッシモ・カヴァレツティ（マルチェロ）そして地元バレンシア出身のソプラノ、カレマン・ロメウ（ムゼッタ）など、今後の活躍が期待される国際色豊かな歌手たちも注目。2012年12月バレンシアのソフィア王妃芸術館公演。</p> <p>[出演]ガム・ジェイムズ (ミミ/ソプラノ) アレクシ・マチャド (ロドルフォ/テノール) マッシモ・カヴァレツティ (マルチェロ/パトリック) カレマン・ロメウ (ムゼッタ/メゾ・ソプラノ) ジャンルカ・ブラット (コッリーネ/バス) マチア・オリヴィエーリ (ジョナール/パトリック) マッテオ・ペイローネ (ペノワ/バス) アンドレア・ズナルスキ (アルチンドロ/バス) パブロ・ガルシア・ロベス (バルニョール/テノール) ボロ・キナー (関税官/バス)</p> <p>[演目]ジャコモ・プッチーニ：4幕のオペラ『ラ・ボエーム』[台本]ジュゼッペ・ジャコザ&amp;ルイーダ・イングリッパ[原作]アンリ・ミュルジエールの小説『ボヘミアンの生活風景』[演出・装置・衣裳・照明]ダヴィデ・リヴエールモール[指揮]リカルド・シャイ[演奏]バレンシア州立管弦楽団、バレンシア自治州合唱団、他[合唱指揮]フランセスク・ベラレス、ルイス・ガッリド、他[収録]2012年12月12日&amp;15日ソフィア王妃芸術館 (バレンシア)</p> <p>[映像監督]ミハエル・バイヤー</p> <p>■字幕/全4幕：約1時間56分</p>

番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
ゼッフィレリの映画『カヴァレリア・ルスティカーナ』	6,6,8,8,21,21,30,30	オプラスツォフとドミンゴ、ブルゾンによる、愛するが故の嫉妬が生んだ男と女の愛憎劇。シチリアの口撮撮影による名匠フランコ・ゼッフィレリの映像美。	シチリアの山間部を舞台に、貧しい人々の暮らして、三角関係のもつれから起きる決闘と殺人…。マスカーニの代表作であると同時に、イタリア・ヴェルズモ・オペラの最高傑作としても名高い『カヴァレリア・ルスティカーナ』を、『ロミオとジュリエット』『永遠のメリア・カラス』などの名匠フランコ・ゼッフィレリが映画化。 サントゥツァにエレーナ・オプラスツォフ、トルリッドゥにブラジンド・ドミンゴ、アルフィオにレナート・ブルゾンという豪華キャストが扮し、ジョルジュ・ブレートルが指揮するイタリア・オペラの殿堂ミラノ・スカラ座のオーケストラと合唱が、緊迫したストーリーをドラマティックに盛り上げます。シチリア地方の風景や家並み、復活祭のミサのシーンなど、映画ならではのロケーション撮影が美しく、愛するが故の嫉妬が生んだ男と女の愛憎悲劇が、ゼッフィレリの映像美で堪能できます。  [ストーリー]シチリアの復活祭の朝。トルリッドゥの兵役中に恋人ローラは馬車屋のアルフィオと結婚する。帰郷したトルリッドゥはローラを忘れるべく、村娘サントゥツァと婚約するが、アルフィオの目を盗みローラと逢引を重ねる。サントゥツァは怒りのあまりアルフィオに告げこし、トルリッドゥは決闘の末、アルフィオに殺される  [出演]エレーナ・オプラスツォフ（サントゥツァ／メゾ・ソプラノ） ブラジンド・ドミンゴ（トルリッドゥ／テノール） レナート・ブルゾン（アルフィオ／バリトン） フェドーラ・バルビエリ（ルチア／メゾ・ソプラノ） アクセル・ガル（ローラ／メゾ・ソプラノ） [演目]ピエトロ・マスカーニ：1幕のメロドラマ『カヴァレリア・ルスティカーナ』[台本]ジョヴァンニ・カルジョーニ＝トゥッツェッティ、グイド・メナッシ[原作]ジョヴァンニ・ヴェルガの同名小説とそれに基づく同人による戯曲『カヴァレリア・ルスティカーナ』[監督]フランコ・ゼッフィレリ[装置]ジャンニ・クラウタ[衣裳]アンナ・アノニ[指揮]ジョルジュ・ブレートル[演奏]ミラノ・スカラ座管弦楽団及び同合唱団[合唱指揮]ロマーノ・ガンドルフィ[制作]1982年イタリア・ドイツ映画 ■字幕／全4幕（映画版）：約3時間5分
ベーム&ウィーン・フィル『フィガロの結婚』	9,9,13,13,15,15,19,19	オペラ映画の最高傑作との誉れ高い映像。ベームの指揮は、ゆったりとしたテンポの中、モーツァルトの美しい旋律をたっぷりと歌い上げるもの。	名コンサートマスター、ヴァルヘルム・ヘルツェル率いるウィーン・フィルの美しいサウンドと室内楽的なハーモニー、さらに名歌手たちのレチタティヴのニュアンスや絶妙なアンサンブルを引き出した、まさに晩年の巨匠ならではの至宝です。 ヘルマン・フライのフィガロとディートリヒ・フィッシャー＝ディースカウのアルマヴィーヴァ伯爵、ミレラ・フレニーのズザナ、キリ・テ・カナワの伯爵夫人、そしてマリア・ユージングのケルビーノは、歌ばかりか、ヴィジュアルや演技面でもまさにまわり役。さらに、脇役たちも演技において存在感を示しています。 鬼オジャン＝ピエール・ボネルの演出は、このオペラの筋骨の楽しさや人違いが引き起こす面白さを、登場人物の遠近処理や表情の撮り方など実験的な手法で描いています。 モーツァルトの音楽、ダ・ポテン台本による人間ドラマ、ベーム&ウィーン・フィルのサウンド、20世紀を代表する名歌手の歌唱を目で楽しめる、最高のオペラ映画です。  [出演]ヘルマン・フライ（フィガロ／バリトン） ミレラ・フレニー（ズザナ／ソプラノ） ディートリヒ・フィッシャー＝ディースカウ（アルマヴィーヴァ伯爵／バリトン） キリ・テ・カナワ（伯爵夫人／ソプラノ） マリア・ユージング（ケルビーノ／メゾ・ソプラノ） パオロ・モンタルソロ（バルトロ／バス） ハザー・ベグ（マルチェリーナ／メゾ・ソプラノ） ヨーン・ヴァン・ケステレン（バジリオ／テノール） ジャネット・ペリー（バルビーナ／ソプラノ） ウィリー・キャロン（ドン・クルツィオ／テノール） ハンス・クレーマー（アントニオ／バス） [演目]ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト：4幕のオペラ・ブッフ『フィガロの結婚』K.492[台本]ロレンツォ・ダ・ポンテ[原作]ピエール＝オギュスタン・カロン・ド・ボーマルシェの戯曲『たわけた一日、あるいはフィガロの結婚』[演出・装置・映像監督]ジャン＝ピエール・ボネル[脚色]ジャン＝ピエール・ボネル&ジャン＝ルイ・マルティノーティ[衣裳]ジャン＝ピエール・ボネル&クリスタ・ウルバ[指揮]カール・ベーム[演奏]ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団（コンサートマスター：ゲアルルト・ヘルツェル）、ウィーン国立歌劇場合唱団、フィルツ・アイゼンベルク（チェンバロ） [音声収録]1975年12月ソフィエンザール（ウィーン） [映像収録]1976年6月シェパード・スタジオ（ロンドン） ■字幕／全4幕（映画版）：約3時間5分
映画『ラ・ボエーム』	9,9,13,13,15,15,19,19	ブッチーニの才能を開花させたのが、4作目のオペラとなる『ラ・ボエーム』です。パリの学生街で、その日暮らしに身をやつしている4人の芸術家の友情と、その内の一人、詩人ロドルフォと病弱のお針子ミミの悲しい愛を綴った物語。『	「冷たき手を」「私の名はミミ」「愛らしい乙女よ」「私が町を歩くと（ムゼッタのワルツ）」「さよなら、あなたの愛の呼び声に（ミミの別れ）」「楽しい朝のめざめも、さよなら」「もう帰らないミミ」「古い外套よ、聞いてくれ」など、全編にわたり美しいメロディや重唱が満載。そのあまりにも切ない旋律とストーリーに誰もが涙を禁じ得ないはず。 2005年ザルツブルグ音楽祭『椿姫』の共演以来、世界的名声を獲得したアンナ・ネトレブコ（ミミ）とロランド・ビヤソン（ロドルフォ）のドリームカップルによる、若々しい演技と艶やかな歌声が何となくも見どころ。バイエルン放送交響楽団を指揮するバルトランド・ビリーのドラマティックな音楽作りも悲恋を盛り上げます。 ロバート・ドーンヘルム監督は全てスタジオで、19世紀半ばのパリの街並みや店、アパートを完全に再現。舞台では不可能な映画ならではのリアリティで、貧しくとも心は豊かだった若者たちの姿を生生きと描いています。  [ストーリー]1830年頃のパリの学生街ラン区で、その日暮らしに身をやつしている4人の芸術家・詩人ロドルフォ、画家マルチェロ、音楽家ジョナール、哲学者コルリーネ、クリスマス・イヴの夜に、ロドルフォはお針子ミミと出会い恋に落ちる。一方、マルチェロとムゼッタはお互いに愛し合っているのに喧嘩ばかり。病気のミミを救えないロドルフォは彼女と別れるが、瀕死のミミはロドルフォの傍らで息絶える。  [出演]アンナ・ネトレブコ（ミミ／ソプラノ） ロランド・ビヤソン（ロドルフォ／テノール） ニコル・キャベル（ムゼッタ／ソプラノ） ジョージ・フォン・ベルゲン（マルチェロ＜声＞ボアズ・ダニエル／バリトン） ヴィクトリ・コワジョフ（コルリーネ／バス） アドリアン・エレト（ジョナール＜声＞ステファーン・ドグー／バリトン） ティツィアーノ・ブランチ（バルトロ／バス） イオアン・ホーゲン（マルチェロ＜声＞ティツィアーノ・ブランチ／バス） エルンスト＝ディーター・ズツァイマー（バルビニョール＜声＞ケヴィン・コナーズ／テノール） コラッド・フーバー（関税官＜声＞ティツィアーノ・ブランチ／バス） マリオ・シュテナー（巡査部長＜声＞ゲラルド・ホイスター／バス） ニコラス・フォン・テル・ナーマー（少年） [演目]ジャコモ・ブッチーニ：4幕のオペラ『ラ・ボエーム』[台本]ジュゼッペ・ジャコーザ&ルイーゼ・イッリカ[原作]アンリ・ミュルジェールの小説『ボヘミアンの生活風景』 [監督&脚色]ロバート・ドーンヘルム[撮影]ヴァルター・キンドラー[編集]イングリッド・コラー & クラウス・フンズビヒラー[装置]フロリアン・ライヒナー[衣裳]ウルフ・フェスター [指揮]バルトランド・ビリー[演奏]バイエルン放送交響楽団及び同合唱団、ゲルトナー・ブランチ州立劇場児童合唱団[合唱指揮]ウド・メルボール、ヴェレナー・サッレ [音声収録]2007年4月ガスタイク・フィルハーモニー（ミュンヘン）でのコンサート収録[映像収録]映画の都ウィーンスタジオ（オーストリア） [制作]2008年 ■字幕／全4幕（映画版）：約1時間51分
アバド&ミラノ・スカラ座『セビリアの理髪師』	2,2,5,5,7,7,10,10,15,15,20,20,25,25	ロッシーニの名を不滅にしたオペラ・ブッフの最高傑作。適材適所のキャスティング、セット撮影で内容もわかりやすい。「序曲」でのアバド39歳の指揮姿にも注目。	ロッシーニの名を不滅にした最高傑作の一つで、今日でも世界中で頻りに上演される名作。物語はモーツァルトの『フィガロの結婚』の前編となるもので、セビリアの街の美しい娘ロジーナとの結婚を望む伯爵がフィガロの機知によってその想いを遂げるというもの。ロジーナを演ずるテレサ・ベルガンサは彼女の当たり役としてその魅力を遺憾なく発揮、そしてヘルマン・フライをはじめとする万全を期した配役。ミラノ・スカラ座音楽監督になったばかりのアバドの軽妙なタクトに 대응するもの。まさにオペラ・ブッフの神髄が堪能できる伝説的映像。  [出演]ヘルマン・フライ（フィガロ／バリトン） テレサ・ベルガンサ（ロジーナ／メゾ・ソプラノ） ルイジ・アルヴァ（アルマヴィーヴァ伯爵／テノール） エンツォ・タラー（バルトロ／バリトン） パオロ・モンタルソロ（ドン・バジリオ／バス） レナート・チェーザリ（フィオレロ／バリトン） ステファニア・マラガー（バルタ／メゾ・ソプラノ） ハンス・クレーマー（アンブロジオ／バス） ルイジ・ローニ（土官／バス） カール・シャイダー（公証人／黙役） [演目]ジョアキーノ・ロッシーニ：2幕のコメディア『セビリアの理髪師（アルマヴィーヴァ、あるいは無用な用心）』[アルベルト・ゼツァによる新校訂版] [台本]チェーザレ・スタルビーニ[原作]ピエール＝オーギュスタン・カロン・ド・ボーマルシェの戯曲『セビリアの理髪師』及びジョヴァンニ・バイジェットの歌劇『セビリアの理髪師』のための台本（ジュゼッペ・ベトロゼッリとの作とされる） [演出・装置・衣裳・映像監督]ジャン＝ピエール・ボネル [指揮]クラウディオ・アバド[演奏]ミラノ・スカラ座管弦楽団及び同合唱団[音声収録]1971年9月ICETスタジオ・フォルマ（ミラノ） [映像収録]1972年7月&8月アテリエール・デュレー（ザルツブルク） ■字幕／全2幕（映画版）：約2時間23分

番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
<b>コンサート</b>			
BBCプロムス2015「バーンスタインのミュージカルと映画音楽」	3,3,27,27,31,31	バーンスタイン生誕100年の今年、プロムス2015で行われたバーンスタイン没後25年ガラ・コンサートの模様を改めて楽しむ。最高のエンターテインメントを満喫！	<p>20世紀を代表する指揮者・作曲家、レナード・バーンスタイン（1918～1990）没後25周年の2015年、バーンスタインのミュージカルや映画音楽を集めた、ロンドンの音楽祭「プロムス」公演。演奏はジョン・ウィルソン指揮の「ジョン・ウィルソン・オーケストラ」。英国出身のウィルソンが1994年に結成した団体で、ブロードウェイ・ハリウッドの音楽のスペシャリストです。プロムス常連の彼らは英国でも大人気で、広大なロイヤル・アルバート・ホールに大勢の聴衆が詰めかけています。</p> <p>ミュージカル『オン・ザ・タウン』で開始、観ながら思わず首や体が動いてしまうこと請け合い。続いて『ベンシルヴァニア通り1600番地』『ワンドフル・タウン』のナンバーで盛り上げます。次々に登場する歌手たちは、さすが本場の一流ミュージカル歌手で、正確で美しい歌唱に、観る人を楽しませる表情と演技も万全。『ダウン・アビー』のチャールズ・ブレイク役と『刑事フォイル』の息子アンドリュ役で日本でも人気爆発のジュリアン・オヴエデンのイケメンぶりに加え、ルイズ・ディアマンが大活躍。ユーモラスなキャラクターでの声質と表情の見事な変化、正確な歌に早口セリフで笑いもとり、これぞ芸達者。オーケストラも同様で、ミュージカルナンバーをオーケストラに聴かせるのはもちろんですが、オーケストラだけの重厚な交響組曲『波止場』では硬派な名演をしっかり披露し、このコンビの確かな実力を示すのです。</p> <p>後半は、『キャンディード』『ウェスト・サイド・ストーリー』のナンバーを中心に、『キャンディード』の超絶技巧で知られる「着飾って、きらびやかに」では、舞台女優スカレット・ストラレンの完璧な歌唱に驚嘆。そして同作の感動的な「さあ畑を耕そう」で大団円を迎え、アンコールは『ウェスト・サイド・ストーリー』の「アメリカ」でコキゲンに幕を閉じます。</p> <p>バーンスタインのアンバーサリーに相応しい夢のような一夜を存分にお楽しみ下さい。</p> <p>[演出]レナード・バーンスタイン：ミュージカル『オン・ザ・タウン』～「まだベッドにいる気分」 「ニューヨーク ニューヨーク」 「寂しい町」 「私は料理も得意」 ミュージカル『ベンシルヴァニア通り1600番地』～「ジェフソン大統領の昼食会の行進曲」 「この家を大切に」 ミュージカル『ワンドフル・タウン』～「ちょっと恋をしたわ」 「男性に嫌われる100の簡単な方法」 交響組曲『波止場』 ミュージカル『キャンディード』～「序曲」 「私はどこでも生きられる」 「ただひたひたか」 「着飾って、きらびやかに」 ミュージカル『ウェスト・サイド・ストーリー』～「体育館でのダンス」 「マリア」 「歌劇『夕七島の騒動』～「島の魔法」 ミュージカル『ピーター・パン』～「一緒に夢を」 ミュージカル『キャンディード』～「さあ畑を耕そう」 ミュージカル『ウェスト・サイド・ストーリー』～「アメリカ」[指揮]ジョン・ウィルソン[演奏]ジョン・ウィルソン・オーケストラ、マイク・ヴェール・シンガーズ[ヴォーカル]ルイズ・ディアマン、ジュリアン・オヴエデン、ルーシー・シャワワー、スカレット・ストラレン、アレクサンドラ・シルバー、スー・アッブルビー、ジーナ・ペック、マー・メドウズ、ジック・ノース、スチュアート・マシュー・ライズ、サラ・ライアン、デーヴィッド・シードン・ヤング、マシュー・シードン・ヤング、ロバート・ウィンスレード・アンダーソン[合唱指揮]クリストファー・ディー[収録]2015年9月5日ロイヤル・アルバート・ホール(ロンドン)[BBCプロムス67][映像監督]アリジット・コールドウェル</p> <p>■字幕/約1時間49分</p>
BBCプロムス2016「ガーシュウィン再発見」	1,1,1,1,1,1,23,23	ロンドン夏の風物詩「BBCプロムス」は、1895年、指揮者ヘンリー・ウッドと興行師ロバート・ニューマンがクラシック音楽を庶民にも親しんでもらおうという意図で創設した音楽祭。	<p>通常のクラシック・コンサートとは異なり、平土間と天井桟敷が見え（プロミンク）であるのが特徴で、会場のロイヤル・アルバート・ホールでは7月中旬から9月中旬にかけて毎晩オーケストラ・コンサートが開催されています。</p> <p>この番組は、アメリカの作曲家としてデビュー及びクラシック音楽の両面で、弟ジョージ・ガーシュウィンと共に20世紀を代表する数多くの楽曲を残したアイラ・ガーシュウィン生誕120周年記念コンサート。映画『踊らん哉』（1937）『ストライク・アップ・ザ・バンド』（1940）『ガール・クレイジー』（1943）『ジークフェルド・フォリーズ』（1946）『ブロードウェイのパーレー夫妻』（1949）『巴里のアメリカ人』（1951）『スタア誕生』（1954）『凡の恋人（FUNNY FACE）』（1957）など、フレッド・アステア、ジーンジャー・ロジャース、ジーン・ケリー、ジューディ・ガーランド、ジッキー・ルーニー、そしてオードリー・ヘッパリングが出演した古き良き時代のミュージカル映画の一場面やスタンダードナンバーが鮮やかに甦ります。</p> <p>英国の若手指揮者ジョン・ウィルソンが結成したジョン・ウィルソン・オーケストラは、1930～50年代のミュージカル映画音楽を演奏する、BBCプロムスではお馴染みの楽団。『The Wicked』でエルファバとグリンダの両方を演じたミュージカルスター、ルイズ・ディアマンやジャズ・シンガーとして活躍するマシュー・フォード、さらには『ダウン・アビー』のチャールズ・ブレイク役と『刑事フォイル』の息子アンドリュ役で日本でも人気爆発のジュリアン・オヴエデンが披露する素晴らしい歌唱も必見。</p> <p>[演出]序曲～ラプディ・イン・ブルー～（ジョージ・ガーシュウィン作曲/レイ・ハインドルフ編曲）、ジョージ&amp;アイラ・ガーシュウィン（サイ・オリヴァー&amp;アクセル・ストルタル編曲）：映画『ガール・クレイジー』～「TREAT ME ROUGH」、ハリー・ウォーレン&amp;アイラ・ガーシュウィン（コンラッド・サリンジャー編曲）：映画『ブロードウェイのパーレー夫妻』～「YOU'D BE HARD TO REPLACE」、ジョージ&amp;アイラ・ガーシュウィン（コンラッド・サリンジャー編曲）：映画『巴里のアメリカ人』～「I'LL BUILD A STAIRWAY TO PARADISE」（天国への階段）、ジョージ&amp;アイラ・ガーシュウィン（サイ・オリヴァー編曲）：映画『ガール・クレイジー』～「FASCINATING RHYTHM」（魅惑のリズム）、ジョージ&amp;アイラ・ガーシュウィン（コンラッド・サリンジャー編曲）：映画『ガール・クレイジー』～「BUT NOT FOR ME」（バット・ナット・フォー・ミー）、ジョージ&amp;アイラ・ガーシュウィン（コンラッド・サリンジャー編曲）：映画『ジークフェルド・フォリーズ』～「THE BABBITT AND THE BROMIDE」（凡人と俗人）、ジョージ&amp;アイラ・ガーシュウィン（ハーバート・スベンサー、フド・リヴィングストン&amp;ロバート・ラッセル・ベネット編曲）：映画『踊らん哉』～フィナル/バレ音楽、ジョージ&amp;アイラ・ガーシュウィン（レオ・アルノー&amp;コンラッド・サリンジャー編曲）：映画『ストライク・アップ・ザ・バンド』～「STRIKE UP THE BAND」（ストライク・アップ・ザ・バンド）、ジョージ&amp;アイラ・ガーシュウィン（コンラッド・サリンジャー編曲）：映画『凡の恋人』～「FUNNY FACE」（ファニー・フェイス）、ジョージ&amp;アイラ・ガーシュウィン（エドワード・B・パウエル編曲）：映画『ゴールドウィン・フォリーズ』～「LOVE WALKED IN」（歩み入る恋）、ジョージ&amp;アイラ・ガーシュウィン（アレクサンダー・カレッジ編曲）：映画『凡の恋人』～「LET'S KISS AND MAKE UP」（キスして仲直り）、バートン・レイン&amp;アイラ・ガーシュウィン（アンドレ・プレヴィン編曲）：映画『GIVE A GIRL A BREAK』～「IN OUR UNITED STATE」、ジョージ&amp;アイラ・ガーシュウィン（レオ・アルノー&amp;コンラッド・サリンジャー編曲）：映画『ブロードウェイのパーレー夫妻』～「THE SWING-TROT」（スウィング・トロット）、ジェローム・カーン&amp;アイラ・ガーシュウィン（カルメン・ドラゴ編曲）：映画『カバガール』～「LONG AGO AND FAR AWAY」（ロング・アゴー）、ジョージ&amp;アイラ・ガーシュウィン（コンラッド・サリンジャー&amp;ジョニー・グリーン編曲）：映画『巴里のアメリカ人』～「I'S WONDERFUL」（スワンダフル）、ハロルド・アーレン&amp;アイラ・ガーシュウィン（レイ・ハインドルフ編曲）：映画『スタア誕生』～「THE MAN THAT GOT AWAY」（去っていった彼）、ジョージ&amp;アイラ・ガーシュウィン（サウル・チャップリン、コンラッド・サリンジャー&amp;ロバート・フランクリン編曲）：映画『巴里のアメリカ人』～「凡音楽、ハロルド・アーレン&amp;アイラ・ガーシュウィン（レイ・ハインドルフ編曲）：映画『スタア誕生』～「I T S A N E W WORLD」（イツ・ア・ニュー・ワールド）、バートン・レイン&amp;アイラ・ガーシュウィン：映画『GIVE A GIRL A BREAK』～「APPLAUSE,APPLAUSE」</p> <p>[指揮]ジョン・ウィルソン[演奏]ジョン・ウィルソン・オーケストラ、ルイズ・ディアマン（ヴォーカル）マシュー・フォード（ヴォーカル）ジュリアン・オヴエデン（ヴォーカル）マイク・ヴェール・シンガーズ[合唱指揮]クリストファー・ディー</p>
アーノンクール&ウィーン・フィル「モーツァルト：ヴァイオリン協奏曲第4番」	1,1,9,9,12,12,17,17,20,20,25,25,28,28	1980年代にニコラウス・アーノンクールが鬼才ヴァイオリニスト、ギドン・クレーメルと共にウィーン・フィルと取り組んだモーツァルト「ヴァイオリン協奏曲全集」は、これまでの既成概念を打ち砕く斬新な解釈が、当時大きな反響を巻き起こしました。	<p>1775年、モーツァルトが19歳の時にザルツブルクで作曲した5曲のヴァイオリン協奏曲は“ザルツブルク協奏曲”と総称され、いずれも自分量が、あるいはザルツブルク宮廷礼拝堂楽団首席奏者アントーニョ・ブルネットのために書かれたのではないかとされています。</p> <p>この番組は、若々しい情感に溢れた第4番。2016年3月5日に86歳で死去したアーノンクール57歳の過激な指揮ぶり、2016年高松宮殿下記念世界文化賞音楽部門を受賞したクレーメル39歳の研ぎ澄まされた感性と恍惚の表情、そして1992年に登山事故で亡くなった名コンサートマスター、ゲアハルト・ハッツェルの懐かしい姿も映像ならでは。</p> <p>なお、モーツァルトのヴァイオリン協奏曲は作曲家自身によるカンツァが残されておらず、この番組ではロバート・D・レヴィン（『ミサ曲』短調K.427訂正完全版を作成）作曲のカンツァを採用しています。</p> <p>[演出]ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト：ヴァイオリン協奏曲第4番二長調K.218</p> <p>[指揮]ニコラウス・アーノンクール[演奏]ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団、ギドン・クレーメル（ヴァイオリン）</p> <p>[収録]1987年1月ムジークフェアラインザール（ウィーン）[映像監督]ロドニー・グリーンバーク</p> <p>■約25分</p>

番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
アーノンクール&ウィーン・フィル『モーツァルト：協奏交響曲』	4,4,6,6,12,12,16,16,22,22,24,24,28,28	協奏交響曲は、独奏楽器がオーケストラと渡り合う協奏曲と性格が異なり、複数の独奏楽器がオーケストラと協調的に響き合うところが魅力です。	<p>モーツァルトは1778年にパリで大流行していた協奏交響曲を木管楽器群とオーケストラの編成で1曲作りますが、翌年ザルツブルクに戻ってヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲を作曲します。この番組は、ニコラウス・アーノンクール指揮ウィーン・フィルが1980年代にヴァイオリニスト、ギドン・クレーメルとタッグを組み、既成概念を打ち砕くユニークなアプローチで全世界にセンセーションを巻き起こした衝撃の『モーツァルト：ヴァイオリン協奏曲全集』映像より、ヴィオラのキム・カシカシアンを加えた『ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲』。HDになったことで、モーツァルトには絶対のプライドを持つウィーン・フィルから、2人の鬼才があの鮮烈な響きと躍動感をどのように導き出したのかがよくわかる。アーノンクールの指揮ぶりにも注目です。</p> <p>[演出]ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト：ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲変ホ長調K.364  [指揮]ニコラウス・アーノンクール [演奏]ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団、ギドン・クレーメル（ヴァイオリン）キム・カシカシアン（ヴィオラ）  [収録]1983年10月ムジークフェラインザール（ウィーン）  [映像監督]クラウス・リンデマン  ■約35分</p>
ウェルザー＝メスト&ウィーン・フィル定期公演2020	19,19,24,24,29,29	しなやかなる颯爽、透明な絢爛。ウィーン・フィルがウェルザー＝メストと伝える、自国の文化の誇り	<p>新型コロナウイルスの影響のため、約3か月の活動休止を余儀なくされたウィーン・フィル（VPO）も6月5日、ハレンボイム指揮による定期公演でようやく再始動。その翌週はムーティ、そして翌々週にはこの番組でお届けするフランツ・ウェルザー＝メスト指揮による定期が開催されました。観客は100名以下という制限があるものの、他国の楽団のように舞台上でのソーシャル・ディスタンスはとらず、「変わらず自分たちの音楽を、文化を伝える」というプライドをかけた公演に臨むメンバーの表情のまぶしいこと。</p> <p>当公演の1曲目は、10数作あるR・シュトラウスのオペラのうち、20世紀初頭の充実期に書かれた8作品目の『インテルメッツォ』から、4つの間奏曲を演奏会用にまとめたものです。『インテルメッツォ』は、シュトラウスの家庭での出来事をもとにしたオペラ。VPOの豪華絢爛、精妙無比、虹のようなオーケストレーションで彩られた音が響く中、4つのサブタイトル通りの情景が目の前に生き活きと浮かび上がります。これはなんといってもVPOの豊潤な音と、シュトラウスのオペラを熟知した、彼らの母体ウィーン国立歌劇場の前音楽監督ウェルザー＝メストとの共同作業でこそなせる技です。当コンビはしなやかな透明感と品位を生み、1曲目後半のワルツではVPOの正月恒例ニューイヤー・コンサートの華麗優美な雰囲気を感じさせずし、幻想的な2曲目はまるで夢を見ているかのよう。</p> <p>2曲目は前曲から約100年前の19世紀初頭、ウィーンで生まれ育ったシューベルト18歳の時の作品です。ハイドン、モーツァルトに範をとる古典的で明澄、愛らしい交響曲で、ウェルザー＝メストとVPOの颯爽とした、そして品格ある演奏によって光彩陸離たる愉悅の中、随所にシューベルトならではの音りと、全編にわたり、弦・管ともVPOにしかない美質を味わうことができます。</p> <p>牧歌的な第2楽章の思いがけぬテンポの速さは、かつてのカルロス・クライバー指揮による名録音の残像を感じさせ、タランテラのリズムによって止めどなく溢れる歌で駆け抜けるフィナーレには、晩年のシューベルトによる交響曲『ザ・グレイト』を想起する人もいるかもしれませんが、VPOによる自国の文化の誇りと響りを伝える名演をお楽しみください。</p> <p>[指揮] フランツ・ウェルザー＝メスト [管弦楽] ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団  [曲目] R・シュトラウス： 歌劇『インテルメッツォ』op.72による4つの交響的間奏曲 1.旅立ち前の興奮とワルツの場面、2.暖炉のかたわらの夢想、3.ゲーム用テーブルで、4.楽しい結末  シューベルト： 交響曲第3番二長調 D200  [収録] 2020年6月21日 ウィーン楽友協会 大ホール [映像監督] ディック・カイス  ■約54分</p>
ギルバート&NDRエルブフィル『マーラー：交響曲第3番』	3,3,7,7,13,13,18,18,23,23,26,26,29,29	NDRエルブフィルと2019年から首席指揮者を務めるアラン・ギルバート。その前年に抜群の個性を見せたマーラー交響曲第3番のしなやかであたたかい好演。	<p>以前はニューヨーク・フィルハーモニックの音楽監督を務め、日本でも東京都交響楽団の首席客演指揮者をはじめ多くの舞台でおなじみのマエストロ、アラン・ギルバート。2019年秋にはドイツの名門楽団、NDRエルブフィルハーモニー管弦楽団（旧ハンブルク北ドイツ放送交響楽団）の首席指揮者に就任しました。その前年秋にこのコンビで来日公演もおこなっており、精緻さと熱気をもった名演を各地で繰り広げました。この映像は2018年4月の客演で、マーラー最長の交響曲第3番を取り上げたときのもの。新しくモダンな内装のエルブフィルハーモニーでの演奏で、ヴァイオリンは対向配置、トロンボーン、チューバが下手（しもて）に並ぶ配置です。</p> <p>ギルバートはエルブフィルの首席客演指揮者を過去に10年以上務めていて、すでに良好な関係を築いていました。お互いに長所を知り尽くしているうえに、ギルバートの音楽性に加え、彼の温かい人間性もあるでしょう、このマーラーでもヒューマンで力強い、かつ流麗な魅力にあふれる名演が実現しました。冒頭ホルンの斉奏の響きにも象徴されるように、全体にわたって常に歌があり、音楽がしなやか。エルブフィルの音色は伝統の美しさを残しながら、個人技も優れ、表現意欲は高く、全奏の輝かしい響きは世界でもトップクラスのものです。</p> <p>30分を超える第1楽章が華麗に終わると、思わず拍手が起ころのも微笑ましく、ギルバートもオケを讃えます。そのタイミングでソリストと合唱団が入場し、第4楽章はアルトのゲルヒルト・ロンベルガーの深い名唱と木管のグリッサンドの粘った処理が印象的です。そして、自然賛歌と言える第6楽章は、全員が一体となって雄大な音楽を作り上げ、感動的な大団円を迎えます。</p> <p>[演出] グスタフ・マーラー：交響曲第3番 二短調  [指揮] アラン・ギルバート [演奏] NDRエルブフィルハーモニー管弦楽団、ゲルヒルト・ロンベルガー（アルト）、ハローファー少年合唱団、バイエルン放送女声合唱団、NDR放送女声合唱団  [収録] 2018年4月6、7日、エルブフィルハーモニー（ハンブルク） [映像監督] ジョージ・ヴェッポルト ■約1時間45分</p>

番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
コチャノフスキー & バリ管「ラフマニノフ：ピアノ協奏曲集」Vol.1	2,2,5,5,7,7,10,10,15,15,20,20,25,25	ロシア・ピアノ主義の伝統を継承する現役ピアニストの最右翼と、ロシア指揮界期待の俊英！濃厚にむせぶラフマニノフのロマンティズムをたぐりよせる	<p>2019年4月27日（土）と28日（日）の週末、パリのシテ・ドラ・ミジクの新しいコンサートホール、フィルモニー・ド・パリでは、セルゲイ・ラフマニノフの4曲のピアノ協奏曲全曲を中心に、『バガニーニの主題による狂詩曲』や合唱曲、室内楽曲を併せた「ウィークエンド・ラフマニノフ」が開催されました。プログラムのメインである協奏曲では、ロシア音楽界期待のスタニスラフ・コチャノフスキーが指揮するバリ管弦楽団が、70年代生まれと90年代生まれの2世代3人のトップ・ピアニストたちをリストに迎えた豪華プログラム。番組ではその1日目、デニス・マツエフが、庄巻のピアノ協奏曲第3番、第4番を披露したコンサートの模様をお届けします。</p> <p>2020年11月にワレリー・ゲルギエフ指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団とともにコロナ禍のなかで敢行した来日公演も記憶に新しいデニス・マツエフ。1975年生まれの彼がチャイコフスキー国際コンクールに優勝したのは1998年、23歳になったばかりの時でした。番組の収録当時43歳。鋭角的な響きで楽器を鳴らし切る圧倒的なテクニックと濃厚な表現はいよいよ円熟の域に突入した観があります。ロシア・ピアノ主義の伝統を現代に継承するピアニストの一番手として、演奏はもちろん、音楽祭をプロデュースしたり、2019年にはチャイコフスキー・コンクールの審査委員長を務めたりと、縦横無尽に活躍中であるのはご存知のとおりです。</p> <p>この2曲のラフマニノフの協奏曲でも、鬼気迫る迫力のフォルティッシモから繊細きまわまるタッチのピアノッシモまで、多彩な表現は圧倒的です。いつもながら、作品と魂が同化するような熱い弾きっぷりはまさに「全集中」。画面を通してひしひしと伝わってくるそのエネルギーが、深い共感呼びます。</p> <p>ラフマニノフの4曲のピアノ協奏曲のなかで、出世作でもある第2番と並んで人気のあるのが第3番。13歳の頃からこの曲を弾いているというマツエフにとっても、自ら「名刺代わり」と呼ぶ、彼の血肉になっているような作品です。一方、それに比べると演奏頻度の少ない第4番ですが、4曲中で最もスケールが大きく、切れ味が鋭いのはこの作品でしょう。米国に亡命してからのラフマニノフが残した数少ない作品の一つです。</p> <p>指揮者のスタニスラフ・コチャノフスキーは1981年生まれですから、グスター・ボ・ドゥタメルと同じ年。サンクトペテルブルク生まれのロシア期待の星で、地元のミハイロフスキー劇場（マールイ劇場）でみっちり経験を積んだ彼は目下、欧米のオペラ劇場やオーケストラの指揮台を次々と制覇している注目株です。2016年にはNHK交響楽団に客演して初来日。ここでの演奏でもバリ管弦楽団の豊かな色彩を的確に引き出して、濃厚なラフマニノフを聴かせるので思わずにんまり。カメラが捉える演奏中の表情からも、誇張のない、真摯で自然なアプローチの音楽作りをする音楽家であることがよくわかります。今後とも目が離せない指揮者の一人でしょう。</p> <p>ヴァイオリンのトップサイドには日本人副コンサートマスターの千々岩英一さんの顔も見えます。</p> <p>【曲目】セルゲイ・ラフマニノフ：交響詩『岩』op.7ピアノ協奏曲第4番短調op.40ピアノ協奏曲第3番二短調op.30音の絵（絵画的練習曲）op.39より第2曲イ短調（アンコール）  【ピアノ】デニス・マツエフ【指揮】スタニスラフ・コチャノフスキー【管弦楽】バリ管弦楽団  【収録】2019年4月27日、フィルハーモニー・ド・パリ【映像監督】イサベル・スラール</p>
コチャノフスキー & バリ管「ラフマニノフ：ピアノ協奏曲集」Vol.2	2,2,5,5,7,7,10,10,15,15,20,20,25,25	ヴェテランの域に達した円熟とみずみずしい情熱と。2019年のパリの春を彩った「ラフマニノフの週末」は、二人の俊英ピアニストを迎えるの濃厚に薫る協奏曲の祭典！	<p>2019年の春。ピアノ協奏曲を中心に、「ウィークエンド・ラフマニノフ」と題してパリで開催されたラフマニノフ特集という注目プログラム。その第2日目の模様をお届けします。ロシア音楽界期待のスタニスラフ・コチャノフスキーがバリ管弦楽団を指揮し、1972年生まれのニコライ・ルガンスキー、1990年生まれのパヴロ・アブドゥライモフという2世代の俊英をリストに迎えた贅沢な協奏曲の祭典です。</p> <p>演奏されたのは、セルゲイ・ラフマニノフのピアノ協奏曲第1番、第2番と、『バガニーニの主題による狂詩曲』。</p> <p>まず登場するのは、モスクワ生まれで1994年のチャイコフスキー国際コンクール最高位（1位なしの2位）のニコライ・ルガンスキー。ラフマニノフは彼が最も高い評価を得ているレパートリーで、そのクールで正確無比なタッチから繰り出される、鋭い切れ味が、わたしたち聴き手の興奮を誘います。</p> <p>ピアノ協奏曲第1番は、モスクワ音楽院の卒業作品として書かれたラフマニノフの初期作品です。人気面では第2番や第3番に一步譲るかもしれませんが、現在演奏されているのは、初稿版が書かれてからおよそ四半世紀後に、作曲家としての地位を確立したラフマニノフによって大幅に改訂されたヴァージョンということもあり、若々しい楽想と成熟した書法が同居する充実作となっています。</p> <p>続いて、ラフマニノフの代名詞ともいえるピアノ協奏曲第2番で登場するのは、ウズベキスタン出身のパヴロ・アブドゥライモフです。収録当時28歳の彼は、現在躍進中の注目株。ラフマニノフは、ゲルギエフとの共演盤も話題になっている得意のレパートリーです。ルガンスキーとは対照的に、ラフマニノフの濃厚なロマンティズムに素直に身を委ねるような情熱的な演奏スタイルに引き込まれます。</p> <p>交響曲第1番が酷評されたショックで長いスランプに苦しんでいたラフマニノフが、心理療法によって復活し、その復活ののろとなったエピソードでも有名なピアノ協奏曲第2番。とうとう流れる雄弁なメロディと、これでもかと連発する超絶技巧が聴く者を圧倒する20世紀の名曲です。</p> <p>そして再びルガンスキーが登場して、ラフマニノフ晩年の名曲『バガニーニの主題による狂詩曲』。有名な第18変奏はじめ、たった一つの主題による変奏から変幻自在な表情を生み出したラフマニノフの技巧に、何度聴いてもため息の出る傑作です。指揮者のスタニスラフ・コチャノフスキーは、1981年サンクトペテルブルク生まれのロシア期待の星。地元のミハイロフスキー劇場（マールイ劇場）でみっちり経験を積み、目下、オペラとコンサートの両輪で欧米の劇場・オーケストラから引っ張りだこの存在です。グスター・ボ・ドゥタメルと同じ年ですから、今後20年、30年と音楽界をリードしていくであろう次代の巨匠候補の一人。ここでの協奏曲のサポートでも、誇張のない、真摯で自然なアプローチの音楽作りが伝わってきて、今後とも目が離せない指揮者であることは間違いありません。</p> <p>【曲目】セルゲイ・ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第1番嬰ヘ短調op.1＊ピアノ協奏曲第2番ハ短調op.18＊子守歌（アンコール、チャイコフスキー/ラフマニノフ編）＊＊バガニーニの主題による狂詩曲op.43＊前奏曲嬰ハ短調op.3-2（アンコール）＊【ピアノ】ニコライ・ルガンスキー＊、パヴロ・アブドゥライモフ＊＊  【指揮】スタニスラフ・コチャノフスキー【管弦楽】バリ管弦楽団【収録】2019年4月28日、フィルハーモニー・ド・パリ【映像監督】イサベル・スラール</p>

番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
ザルツブルクのニューイヤー・コンサート2019「グリーンギンガーを迎えて」	1,1,9,9,1 2,12,17, 17,20,20 ,25,25,2 8,28	腕利き奏者たちが大集結のモーツァルテウム吹奏楽団恒例ニューイヤー・コンサート。ゲストに地元出身のスーパードパーカッショニスト、M.グリーンギンガー！	<p>管楽器のオールスター軍団「ザルツブルク・モーツァルテウム吹奏楽団」によるニューイヤー・コンサートは、毎年1月6日の公現祭（エピファニー）に開催される、大好評の恒例行事です。2019年は「オーストリア＝ハンガリー帝国の響き」をテーマに、ウィーン・ワルツはもちろん、オーストリア、ハンガリー、そしてボヘミア、モラヴィアなどで活躍した作曲家たちの作品を集めた、ニューイヤーらしい華やかなプログラムで行なわれました。</p> <p>ザルツブルク・モーツァルテウム吹奏楽団は、モーツァルテウム大学（モーツァルテウム音楽院）の出身者を中心に、ヨーロッパの主要オーケストラで活躍する管楽器奏者たちが集結して2002年に設立されたオールスター吹奏楽団です。首席指揮者はホルン奏者でもあるハンス・エルク・アングラー。2010年にスタートしたニューイヤー・コンサートは、例年は祝祭大劇場で開催されますが、この年はフルゼンライト・シミュレーションに会場を移して行なわれています。</p> <p>プログラムを飾っているのは、ハプスブルク帝国の最後の100年間に活躍した作曲家たち。ウィーン古典派のモーツァルト、ハイデン、ベートーヴェンが出てこなくても、ハプスブルク音楽界の顔ぶれは華やかです。シュトラウス一家のワルツやポルカ、行進曲はもちろん、帝国の一部だったチェコ音楽の祖であるベドルジハ・スメタナから、人生の半分以上をウィーンで過ごしたヨハネス・ブラームス、ウィーン宮廷舞踏会最後の音楽監督カール・ミハエル・ツィラーや、父子三代にわたってウィーン・フィルのコンサートマスターを務めたヨーゼフ・ヘルメスベルガー2世に至る面々の作品。ふだん管弦楽でおなじみの作品の数々を吹奏楽で聴くのは新鮮ですが、彼らの見事な演奏は色彩も豊か。まったく違和感はありません。</p> <p>そんな「ハプスブルク帝国プログラム」の真ん中に、ゲストとして迎えられているのが、地元ザルツブルク出身の超絶技巧マルチ・パーカッショニスト、マルティン・グリーンギンガー。このコンサートの目玉です。1983年生まれのグリーンギンガーもかつてモーツァルテウム大学で学び、現在は母校の教授も務めており、気心の知れた仲間たちとの共演ということになります。演奏しているのは「モーツァルテウム・パーカッション組曲」と題したスペシャルプログラム。彼の広範なレパートリーからピックアップした8曲を抜粋してひとつにまとめた、いわば「ベスト・オブ・グリーンギンガー」のように、さまざまな打楽器の音や多彩な奏法とともにグリーンギンガーの魅力を一度に楽しめる、うれしい構成です。</p> <p>彼のために作曲されたアヴネル・ドルマンやフリードリヒ・チェルハの打楽器とオーケストラのための協奏曲や、ジャズのビッグバンド作品を、吹奏楽用にアレンジして演奏しているわけですから、これは結構な労作。一方でグリーンギンガーがソロで演奏している部分もあり、たとえばケーシー・カンジェロシンの『パッド・タッチ』という作品には要注意です。暗闇の中で青い照明で照らされた顔と、蛍光色に光るスティックは、まるで「ブル・マン」のよう。しかもそのスティックの動きからさまざまな音が出てくるのが非常に不思議です。じつはこれ、再生音に合わせてスティックを動かすという作品で、いわば「バトマイム」。しかもその見事なリズム感と同期具合は見ものです。</p> <p>日本の打楽器界のレジェンド安倍圭子のマリンバ協奏曲を超速でキレイに叩ききると、地元のスターのスゴ技に、客席は大きな歓声に包まれます。</p> <p>[演奏] マルティン・グリーンギンガー（打楽器）＊ハンス・エルク・アングラー指揮、ザルツブルク・モーツァルテウム吹奏楽団</p> <p>[曲目] カール・ミハエル・ツィラー：行進曲「軍服の魅力」～喜歌劇「放浪者」op.493よりヨーゼフ・ランナー：ワルツ『モーツァルト』op.196ヨーゼフ・シュトラウス：ポルカ「腕を組んで」op.215フランツ・フォン・スベ：喜歌劇「スベの女王」序曲『モーツァルテウム・パーカッション組曲』＊ジョン・コリアーノ：打楽器協奏曲『奇術師』第3楽章・アヴネル・ドルマン：打楽器協奏曲『フロレンス・イン・タイム』第1楽章・フリードリヒ・チェルハ：打楽器協奏曲第3楽章・ケーシー・カンジェロシ：パッド・タッチ・ミシェル・カミロ：ワン・モア・チャンス・ジェス・シーフ：チャップスタコヴィチ（Chopsatkovich）【ドミトリー・ショスタコヴィチ：弦楽四重奏曲第8番/短調第2楽章による】・スラヴィク・スタホフ：鼓動・安倍圭子：プリズム・ラプソディ・クリウス・フチーク：ワルツ『冬の嵐』op.184ヨーゼフ・ヘルメスベルガー2世：ポルカ・マズルカ『二人きり』op.15ベドルジハ・スメタナ：歌劇「売られた花嫁」より～道化師の踊り/ハバネラ『モーツァルテウム・パーカッション組曲』第14曲「舞臺の踊り」による</p>
ザルツブルク音楽祭2020「グリーンギンガー＆パーカッシヴ・プラネット・アンサンブル」	1,1,9,9,1 2,12,17, 17,20,20 ,25,25,2 8,28	<p>現代最高のパーカッショニストが20世紀の打楽器音楽の代表作3つを取り上げた注目公演！コロナ禍での開催を決断した創立100周年のザルツブルク音楽祭の貴重な記録。パンデミックの困難な状況のなかで開催された2020年のザルツブルク音楽祭。地元ザルツブルク出身のスーパードパーカッショニスト、マルティン・グリーンギンガーが、自らの主宰する「ザ・パーカッシヴ・プラネット・アンサンブル」を率いて、現代打楽器音楽の古典ともいえる3曲を演奏した公演の映像をお届けします。</p> <p>2020年の夏は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、世界中のほとんどの音楽祭が開催中止となりました。そのなかで、ちょうど創立100周年の節目を迎えていた老舗ザルツブルク音楽祭は、大幅に規模を縮小して開催を決定。44日間に16会場で200公演が行なわれる予定だった音楽祭は、30日間8会場110公演となりました。国の基準よりも徹底した感染防止対策も実行、準備期間中のPCR検査でスタッフ一人の陽性が報じられたものの、開催期間中は一人の感染者も出さずことなく終了することができました。番組は、会期の終わり近くの8月28日に行なわれた公演の様態です。</p>	<p>「現代最高のパーカッショニストの呼び声も高いマルティン・グリーンギンガーは1983年ザルツブルク生まれ。父親も打楽器奏者で、モーツァルテウム音楽院（現モーツァルテウム大学）で教えていた。彼自身もモーツァルテウム学び、現在は打楽器科の教授を務めている。ザルツブルクの生んだスター音楽家です。</p> <p>コンサートには「ビッグ・スリー」というタイトルが付けられました。多くの打楽器奏者がそうであるように、彼のために書かれた多くの作品を含め、おもに同時代の現代作曲家の作品をレパートリーに活動しているグリーンギンガーですが、ここでは、ヴォルフガング・リーム（1952～）、ヤニス・クセナキス（1922～2001）、ステイヴ・ライヒ（1936～）という、現代音楽界の3人のレジェンドたちが、1970年代から1980年代にかけて作曲した、20世紀の打楽器作品の記念碑ともいべき作品を演奏しています。</p> <p>1曲目はヴォルフガング・リームの、6人の奏者のための『トットウグリVI（十字架）』。「新しい単純性」「新ロマン主義」の作曲家として分類されるリームですが、すでに400を超える作品を作曲している多作家で、その作風や書法をひとつに括ることは困難です。『トットウグリVI』は、20世紀前半のフランスの前衛詩人であり演劇人のアントナン・アルトールの同名の詩に触発された作品。アルトールの詩は、メキシコ先住民の居住地で体験した、彼らのベヨトル（ベヨーテ）の儀式に基づくものです。このリームの作品は、まず単独の打楽器アンサンブル作品として1981年に、その後、オーケストラと合唱、ナレーターを伴う1時間半を超える大規模な舞踏のための作品を構成する最後の部分として1982年に初演されています。ここで演奏されている、合唱（映像からははっきりしないものの、おそらくは録音によるPA再生）が入る版は、その全曲版のほうのコアによるものです。</p> <p>2曲目は、ヤニス・クセナキスの代表作でもある『プレアデス』。1979年に初演された6人の奏者のための作品です。「鍵盤」「金属」「皮（太鼓）」、そしてそれらの組み合わせという、打楽器を素材や構造で分けた4つの楽章で構成されています。ただし、各楽章をどのように並べるかは、演奏者の自由裁量です。珍しい楽器が使われているのが「金属」の楽章で、6人が叩いているのは「sixten」という、この曲のために特別に作られた楽器です。6人の奏者の「six」と、クセナキスXenakisの最初の3文字「xen」を取って名付けられました。画面からは、木琴や鉄琴と同じように、ピアノの鍵盤状に金属柱が並べられているのがわかりますが、この19本の金属柱は、各片が不規則な音程になるように、また6台がユニゾンにならないように、つまり19本×6台＝114本の、微妙に異なるピッチの素材を使うことが要求されています。</p> <p>そして最後は、「繰り返しが陶酔を生むミニマル・ミュージックの先駆者ステイヴ・ライヒが1971年に作曲した初期の代表作『ドラミング』です。反復のなかで、リズムのずれが生む不思議な効果。「ミニマルズの最初の傑作」とも評される作品です。全体は4つのパートから構成されています。番組のテロップには「Part One」と表示されていますが、実際には、第1部を中心に、全体を抜粋して再構成しているようです。女声と指定されている歌声（男性中心の）全員で、またごくわずかですが電気的に変調した音声も加えるなど、自由なアプローチで作品を楽しんでいるのはグリーンギンガーらしいところでしょう。この曲のみ総勢10人での演奏。なんとグリーンギンガーの同名の父親（マルティン・グリーンギンガー・シニア）も加わり、地元での父子共演、演奏後は客席のヴォルテージも最高潮に達しています。</p> <p>考えてみると、ここで演奏されているのは、もう40～50年前の音楽。とく難しく捉えて敬遠しがちな現代音楽ですが、ニコニコとじつに楽しそうに演奏する彼らの様子は、そんな食わず嫌いの偏見も払拭してくれるにちがいない。</p> <p>[演奏]</p> <p>マルティン・グリーンギンガー（打楽器）ザ・パーカッシヴ・プラネット・アンサンブル [マルティン・グリーンギンガー・シニア、アーロン・グリュンヴァルト、ダーフィット・ヘートルモーザー、ユルゲン・ライトナー、ヒバルト・ブッツ、グレゴール・レシュ、スラヴィク・スタホフ、ヴィヴィ・ヴァッシャー・ヴァ、ヴァレンティン・フェッテル]</p> <p>[曲目] ヴォルフガング・リーム：トットウグリVI（十字架）ヤニス・クセナキス：プレアデスI. Claviers（鍵盤）／II. Métaux（金属）／III. Mélanges（ミックス）／IV. Peaux（皮）</p>

番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
シフのレクチャーコンサート「バッハ：6つのパルティータ」	3,3,7,7,1 3,13,18, 18,23,23 ,26,26,2 9,29	解き明かされるバッハの作曲奥義。現代最高のピアニストによる高く深く、機知に富んだレクチャー・コンサート	<p>サー・アンドラーシュ・シフは掛け値なし、現代最高のピアニストのひとり。モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト等々の王道レパートリーで、純粋に作曲家の音楽そのものが伝わるような演奏をします。それはまるで演奏家を介さないか如く……。特に若い頃から貫いて弾き続けているJ.S.バッハにおいては、歴史的にも最高の演奏家のひとりといえるでしょう。当番組ではシフがベルリンで行ったバッハの「6つのパルティータ」についてのレクチャー・コンサートをお届けします。</p> <p>「バッハはこの6曲がいっぺんに弾かれることなど考えたこともなかっただろう」と前置きし、調性や音楽の性格から決めたい独自の曲順でレクチャー・演奏を進めていきます。音楽に對する厳しさとユーモアが渾然一体となった語りは、シンプルでありながら奥深い味わい。演奏はさらにその言葉も100%以上に反映し、音は結晶のように純粋、深く静かな美しさを基え、なんと雄弁に語り歌うことが、随所で「なるほど……」とため息をつきたくなるほど、説得力と生命感に富んでいます。</p> <p>シフは「パルティータの6曲のキャラクターの違いを示し、共通したアルマンド、クランツ、サラバンドなどがそれぞれドイツ、イタリア、スペイン他の舞曲であり、パルティータはそれらを卓越したセンスで組み合わせた曲集であること、バッハがいかにこれらの外国の音楽を吸収・消化したか、そして演奏するにあたってそれら舞曲の様式を考慮することの重要性などを、知的に実践的に、次々と解き明かしていきます。時に細かく分析したり、それに類する他ジャンルの曲を弾いてみたり（『マイ愛難曲』の Aria など）、幅広い知識と経験をおしみなく、自然に聴衆への教示に結び付けられるさまは感動的です。</p> <p>特に「どんな楽器といえども人間の声と同じ『語り』『歌う』ようにしなければ」と語るシフの言葉や、1時間半もの演奏とレクチャーで楽譜も台本もなしというあたり、この大演奏家の矜持を強く感ずると思います。</p> <p>〔演奏〕サー・アンドラーシュ・シフ（レクチャー、ピアノ） 〔曲目〕ヨハン・セバスティアン・バッハ：パルティータ第5番ト長調BWV829パルティータ第3番イ短調BWV827パルティータ第1番変ロ長調BWV825パルティータ第2番ハ短調BWV826パルティータ第4番ニ長調BWV828パルティータ第6番ホ短調BWV830 〔収録〕2018年6月 ベルリン、ピエール・ブレーズ・ザール [映像監督] フレデリック・ドレスク</p>
シフのレクチャーコンサート「バッハ：ゴルトベルク変奏曲」	3,3,7,7,1 3,13,18, 18,23,23 ,26,26,2 9,29	これぞ鍵盤芸術の粋！まるで人生のような「ゴルトベルク変奏曲」の道を示す、現代最高のピアニストによるレクチャー・コンサート	<p>J.S.バッハの「ゴルトベルク変奏曲」は古今東西の変奏曲の中でも最高峰、ベートーヴェンはじめ、後の作曲家にも絶大な影響を与えた1曲です。この曲について、現代最高のピアニストのひとり、殊にバッハ演奏については歴史的な演奏家といえるサー・アンドラーシュ・シフがレクチャー・コンサートを行う……。まさに鍵盤芸術の粋を目の当たりにできるのが当番組です。</p> <p>前半にレクチャー &amp; 演奏、後半に全曲演奏をする構成。その前半は、「ゴルトベルク変奏曲」の成り立ちについての言い伝えから、最初の Aria のベースラインがすべての基になって全体がカテドラルのような音の殿堂となっていく構成について、また全曲ト長調とト短調でできている話などから始まります。変奏が30あること、3曲ずつ組になって構成されていること（その3つめにカノンがある）など、「3」という数字が音楽はもとより多くの文化にとって大事な数字であるという指摘も面白く、要所で語られる「偉大な音楽は楽器を超える」「ピアノは打楽器ではなく、人間の声で歌うように弾くべきだ」というような金言も胸にしみます。1つ1つの変奏のスタイルや音構成を端的に分析的に語りつつも、機知の富んだジョークも交えたレクチャーは実にユニーク。さらに、その後の全曲演奏はそれらを100%以上に反映して圧巻です。</p> <p>結晶のように純粹なタッチ、深く静かな音。シフが長い年月をかけて探求・研究し練りあげた演奏は、秩序と自発的な自由の双方を高度に実現し、この変奏曲がもつ広大な宇宙的な高みと深さを開陳していきます。各声部の弾き分けも驚異的で、1人で演奏しているのに複数の人が一斉に弾き、どの旋律も自由に走っていくかのよう。そして舞曲の総合体であるこの変奏曲は、まるで山あり谷ありの人生のようで、それらを経た後に円環を開ける最後の Aria は冒頭のものと同じであるにも関わらず、まったく違う風景に見えてくる不思議。シフは憑かれたようにただその世界の流れの中に没入しているようで、実はそのすべてを冷静にコントロールしている……。畏敬の念を抱かざるをえない素晴らしい演奏です。</p> <p>〔演奏〕サー・アンドラーシュ・シフ（レクチャー、ピアノ） 〔曲目〕ヨハン・セバスティアン・バッハ：ゴルトベルク変奏曲BWV988 〔収録日〕2017年6月 ベルリン、ピエール・ブレーズ・ザール [映像監督] エリック・シュルト</p>
ドゥダメル & SBYO『ザルツブルク音楽祭2008』	19,19,24 ,24,29,2 9	2008年夏、ザルツブルク音楽祭デビューを飾ったグスターボ・ドゥダメルとベネズエラ・シモン・ボリバル・ユース・オーケストラ（SBYO）の興奮のコンサート。	<p>1981年ベネズエラ生まれのドゥダメルは、2004年第1回グスタフ・マーラー指揮者コンクールに優勝し、世界の権衡台上に躍り出た27歳の俊英指揮者。シモン・ボリバル・ユース・オーケストラは、南米ベネズエラの音楽教育「エル・システマ」で学ぶ16歳から22歳までの若き演奏家によって結成されたオーケストラ。貧困や犯罪から音楽が人生を大きく変え得るという絶対的信念の下、ベネズエラから発信された音楽教育のアプローチは全世界の人々に音楽のあるべき姿を思い起こさせる存在となりました。</p> <p>ベートーヴェンの三重協奏曲は、ザルツブルク音楽祭復帰が大きな話題を呼んだマルタ・アルゲリッチと、若きカノン兄弟がリストという2008年12月ドゥダメル &amp; SBYO初来日公演と同じ顔ぶれ、3人の完璧なアンサンブルとドゥダメルのスリリングな駆け引きは見応え十分。『展覧会の絵』ではドゥダメルが超大編成オーケストラを見事に統率。定番のアンコール、ヒサステラの『マランボ』では手綱を外して楽団員も入り入り。ザルツブルク祝祭大劇場の観客を熱狂の渦に巻き込みます。</p> <p>ドゥダメルの生氣と希望に満ちた指揮姿、そして彼のタクトを信頼して一心に見つめるオーケストラ・メンバーの輝く瞳。「音楽って素晴らしい！」と素直に思う、見るものを驚嘆みにする番組です。</p> <p>〔演目〕ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：ピアノ、ヴァイオリンとチェロのための三重協奏曲ハ長調Op.56、モテスト・ムルジグスキー（モーリス・ラヴェル編曲）：組曲『展覧会の絵』、ヨハン・シュトラウス1世：ラデツキー行進曲Op.228、アルベルト・ヒサステラ：バレエ『エスタンシア』組曲Op.8a～終幕の踊り『マランボ』 〔指揮〕グスターボ・ドゥダメル〔演奏〕ベネズエラ・シモン・ボリバル・ユース・オーケストラ、マルタ・アルゲリッチ（ピアノ）ルノー・カフゾン（ヴァイオリン）ゴージェイ・カフゾン（チェロ）〔収録〕2008年8月29日ザルツブルク祝祭劇場『ザルツブルク音楽祭2008』〔映像監督〕アグネス・メス ■約1時間27分</p>
ハーディング&バリ管2016「イザベル・ファウストと共に」	4,4,27,2 7,31,31	バリ管音楽監督就任直前のハーディングが、ベルクとマーラーの名作で清新な名演を披露。ファウストのヴァイオリンも完璧にして壮絶！	<p>2016年の秋からバリ管交響楽団の音楽監督に就任したダニエル・ハーディング。この映像は就任直前の客演コンサートの模様で、良好な関係が見取れます。年齢的には中堅の域に入ったイギリス出身のハーディングが、バリ管と程よい緊張感を保ちつつ、その美質を活かした演奏を作りあげています。対向配置、コントラバスは正面奥に横一列と、こだわりの配置にも注目。</p> <p>しかし前半のベルクのヴァイオリン協奏曲の見どころは、名ヴァイオリニスト、イザベル・ファウストの「フォー・マンズ」でしょう。考え抜かれた表現を堅実な技術で作りあげながら、信じられない高みに達してしまうファウスト。ハーディングも気迫あふれる表情で見事にバリ管を操ります。ベルクが亡き少女への想いを込めた神秘的な傑作で、ファウストとハーディングが出会い、完璧さと妖気たっぷりの表現が両立した名演が実現しました。ファウストのソロのアンコールは、クルタークのちょっと不思議な小品。</p> <p>後半のマーラー交響曲第4番も精妙な名演。ハーディングの得意演目で、バリ管の能力を絶妙に引き出した演奏を展開します。特に全体を横溢する夢幻的な響きは実に美しく、どの旋律もしなやかに優しい表情をもち、それでいて曖昧さはなく、複雑な音の動きも明晰にとらえられます。客演時からのこの水準の演奏で、就任後の共同作業に大いに期待が高まったことでしょう。第4楽章で歌うクリスティーナ・ランズハマーはミンヘン生まれのソプラノ歌手。本作を得意として、世界的指揮者との共演も多い名歌手で、本公演でも「天上の子供」の声をみずしく聴かせてくれます。</p> <p>映像は細かく目まぐるしいカット割りではなく、落ち着いた観られる編集になっており、じっくり楽しめます。ハーディングが作りあげる「天使」をキーワードにしたプログラムで、リストの名技とバリ管の多彩な音色表現を堪能してください。</p> <p>〔演目〕アルビン・ベルク：ヴァイオリン協奏曲『ある天使の思い出に』、ジェルジ・クルターク：『サイン、ゲーム、メッセージ』～「ドローソ」、グスタフ・マーラー：交響曲第4番ト長調〔指揮〕ダニエル・ハーディング〔演奏〕バリ管交響楽団、イザベル・ファウスト（ヴァイオリン）クリスティーナ・ランズハマー（ソプラノ）〔収録〕2016年5月19日フィルハーモニー・ホール〔映像監督〕ジャン＝ピエール・ロワジ■字幕／1時間50分（番組枠）</p>



番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
ハリウッド in ウィーン 2014	3,3,27,27,31,31	じつはハリウッドにも多大な影響を与えていた音楽の都ウィーン！ サウンドトラック界のバッハ一族、ニューマン・ファミリーの魅力を堪能する映画音楽の祭典。音楽の都に響くスクリーン・ミュージックの名作の数々。「ハリウッド・イン・ウィーン」は、2007年から開かれている映画音楽によるガラ・コンサートです。番組では、2014年、『トイ・ストーリー』シリーズなど多くのピクサー作品で知られる作曲家ランディ・ニューマンが主役を務めた公演の模様をお届けします。	<p>「ハリウッド・イン・ウィーン」は、ウィーン市が主宰する「マックス・スタイナー賞」の受賞者コンサートを兼ねて行なわれています。『風と共に去りぬ』（1939）や『カサブランカ』（1942）などの音楽で知られるマックス・スタイナー（1888～1971）はウィーン出身の作曲家。1919年に渡米し、RKOやワーナー・ブラザースで300本以上の映画音楽を作曲、3度のアカデミー作曲賞を獲得しています。映画音楽に後期ロマン派のスタイルを持ち込み、台詞のバックにも音楽を流す手法や、映像と緊密にシンクロさせた音楽のあり方など、ハリウッドにおけるスタイナーの功績は多大です。ハリウッドとウィーンには深いつながりがあるのです。そしてじつは、この年のスタイナー賞受賞者であるアメリカの作曲家ランディ・ニューマンも、ウィーンの世界音楽界と縁のある人物です。</p> <p>スタイナーがアメリカに渡ったのは第一次世界大戦の影響ですが、ナチの台頭でアメリカに逃れたウィーンゆりの音楽家も大勢いました。アルマ・マラー、ブルーノ・ワルター、エーリヒ・ヴォルフガング・コルンゴルト、アレクサンダー・フォン・ヴェムリンスキー…。そしてアルノルト・シェンベルク。現代作曲家のジョン・ケージが南カリフォルニア大学でシェンベルクの生徒だったことは有名ですが、『聖処女』（1943）や『慕情』（1955）でオスカーを受賞している巨匠アルフレッド・ニューマンも、シェンベルクのレッスンを受けた生徒の一人でした。ニューマン家は、彼自身の兄弟であるライオネル・エミール、そして二人の息子トーマスとデヴィッドも映画音楽作曲家という、映画音楽界のバッハ一族のようなファミリーなのですが、アルフレッドの妹の息子、つまり彼の甥がランディ・ニューマンなのです。</p> <p>ランディ・ニューマンは最初ソングライターとして活躍し始め、1970年にスリー・ドッグ・ナイトが歌って全米11位を獲得した『ママ・トールド・ミー・ノット・トゥ・カム』は彼の作品です。1980年代から映画音楽にシフトし始め、ピクサーの初長編アニメーション作品だった『トイ・ストーリー』の音楽を担当した1995年以来、同社との仕事を数多く手がけています。2002年には『モンスターズ・インク』（2001）の『君がいないと』でアカデミー歌曲賞を受賞するなど、ニューマン・ファミリーの中でも最も成功している作曲家です。</p> <p>コンサートは『コメディ・トゥナイト』と題されており、前半は、題名曲をはじめとする、1960年代からのコメディー映画が中心。ウィーン放送交響楽団を指揮するのはランディのいとこにあたるデヴィッド・ニューマンです。デヴィッド作曲の『ローズ家の戦争』もプログラムに加わっていますが、その前には父アルフレッドが作曲した、有名な20世紀フォックス社のオープニング・ファンファーレも演奏する粋な演出。そしてプログラム後半がランディ・ニューマンの作品集で、ピクサー・アニメでおなじみの、親しみやすいメロディの数々をたっぷりと楽しめます。ランディ自身もステージに登場、オーケストラを指揮したり、弾き語りも歌ったり、映画音楽界の大ウェデランの演奏風景を見ることができる貴重な映像です。</p> <p>楽友協会ホールと並ぶウィーンのクラシックの殿堂コンツェルトハウスも、この日は色とりどりの照明に包まれムード満点。ステージ背後にはスクリーンが設置され、音楽とともに映像が映し出されますが、ただ単に映画の本編映像を映し出すのではなく、音楽に合わせたオリジナルのイメージ映像が雰囲気盛り上げています。</p> <p>[演目] マックス・スタイナー&amp;ブルース・プロートン：ハリウッド・イン・ウィーン・ファンファーレ、ステイプン・ソンドハイム：映画『ローマで起きた奇妙な出来事』～『コメディ・トゥナイト』、アーネスト・ゴールド：映画『おかしなおかしなおかしな世界』～メインテーマ、アルフレッド・ニューマン：20世紀フォックス・ファンファーレ、デヴィッド・ニューマン：映画『ローズ家の戦争』～メインテーマ、ヘンリー・マンシニ：映画『ピンク・パンサー』、ジム・ヘンソン&amp;サム・ボルト：TVバラエティ『マuppet・ショウ』、ダニー・エルフマン：映画『ザ・シンパソンズ』、ルドヴィック・アールズ：映画『アーティスト』～メインタイトル、ジョン・ウリアムズ：映画『サザンパシフィック』～メインタイトル、クレイグ・アームストロング：映画『ラブ・アクチュアリー』より『グラスゴーより愛のテーマ』、『PMの愛のテーマ』、ハーワード・グッドール：映画『Mr.ビーン』～この人を見よ、エリック・アイドル：映画『ライフ・オブ・ブライアン』～「オールウェイズ・ルック・オン・ザ・ブライト・サイド・オブ・ライフ」、ランディ・ニューマン：映画『バグズ・ライフ』序曲、ランディ・ニューマン：映画『モンスターズ・ユニバーシティ』、ランディ・ニューマン：映画『モンスターズ・インク』組曲、ランディ・ニューマン：『モンスターズ・インク』主題歌、ランディ・ニューマン：映画『トイ・ストーリー2』～『ホエイン・シー・ラヴド・ミー』、ランディ・ニューマン：映画『ナチユラリ』組曲、ランディ・ニューマン：映画『アヴァロン』組曲、ランディ・ニューマン：映画『バグズ・ライフ』～『フリック・マシーン』、ランディ・ニューマン：ソング・モデル 【僕らはひとつ（『トイ・ストーリー3』）～タイム・オブ・ユア・ライフ（『バグズ・ライフ』）～ヘン・モア・アワー（『ラガタイム』）～マイ・ネーム・イズ・ジェームス（『ジャイアント・ピーチ』）～夢まであと少し（『プリンセスと魔法のキス』）～君がいないと（『モンスターズ・インク』）】、ランディ・ニューマン：TVドラマ『名探偵モンク』～『イック』</p>
ハリウッド in ウィーン 2017	3,3,27,27,31,31	映画音楽の祭典「ハリウッド・イン・ウィーン」の第10回公演はダニー・エルフマン特集。幻想的な雰囲気のほか、もちろん彼自身の歌声も披露！	<p>「ハリウッド・イン・ウィーン」は、ウィーン市が主宰する「マックス・スタイナー賞」の受賞者コンサートを兼ねて行なわれており、この年の受賞者が、鬼才ティム・バートン監督との強力タッグで知られるエルフマンでした。コンサート前半では、『おとぎ話』と題して、メルヘンやファンタジー映画音楽の名作を、そして後半には、バートン監督作品はじめ、エルフマンが手がけた名曲の数々をお楽しみいただけます。</p> <p>マックス・スタイナー（1888～1971）について紹介しておきましょう。彼は『風と共に去りぬ』（1939）や『カサブランカ』（1942）などの音楽で知られるウィーン出身の作曲家です。しかも名付け親はリハルト・シュトラウスで、ピアノをブラームスに個人レッスン、ウィーン楽友協会音楽院（ウィーン国立音楽大学）ではマラーの教えも受けたという音楽エリート。それもそのはずで、彼の同名の祖父マクシミリアン・シュタイナーはアン・デア・ウィーン劇場の支配人で、ヨハン・シュトラウスIIの『こもり』初演のプロデューサーだったという人物。その息子がシュタイナーの父親ガボールも俳優で劇場経営者。そして『第三の男』で有名になった、プラーター公園の大観覧車を作ったのもガボールでした。そんな音楽都市ウィーンの申し子のような生まれ育ちのマックスは、1919年に渡米し、RKOやワーナー・ブラザースで300本以上の映画音楽を作曲、3度のアカデミー作曲賞を獲得しています。映画音楽に後期ロマン派のスタイルを持ち込み、台詞のバックにも音楽を流す手法や、映像と緊密にシンクロさせた音楽のあり方など、ハリウッドにおけるスタイナーの功績は多大です。ハリウッドとウィーンには深いつながりがあるのです。</p> <p>ダニー・エルフマンは1953年ロサンゼルス生まれ。ヴァイオリンを学び、ニーノ・ロータやバーナード・ハーマンらの映画音楽に影響を受けたといいます。1980年に兄リチャードが製作・監督した『フォービテン・ゾーン』で初めてサウンドトラックを手がけます。1985年、ティム・バートン監督の初長編映画『ピーウィーの大冒険』で組んだのをきっかけに、その後『バットマン』（1989）『シザー・ハンズ』（1990）『チャーリーとチョコレート工場』（2005）『アリス・イン・ワンダーランド』（2010）から最新作の『ダンボ』（2019）まで、バートン作品のほとんどの音楽を担当しています。『ナイトメア・ビフォア・クリスマス』（1993）では、主人公の歌を担当するとともに別の役で声優としても出演するなど、作曲家としてはわけてもユニークな活躍ぶり。もちろん当公演でも、主人公ジャックの歌「クリスマスって？」では自ら出演して歌声を披露しています。</p> <p>指揮者には二人のエキスパートが起用されています。前半はイギリスの指揮者ジェイムズ・シエアマン。映画音楽を本職としており、『美女と野獣』や『アラジン』など近年の話題の実写版映画のオーケストレーションなども手がけています。後半のエルフマン作品は、ハリウッド・ボウル管弦楽団などでもおなじみの大御所ジョン・マウチエリ。「ナイトメア・ビフォア・クリスマス」では、マイクをとってラップ調の歌声も聴かせています。</p> <p>楽友協会ホールと並ぶウィーンのクラシックの殿堂コンツェルトハウスも、この日は色とりどりの照明に包まれています。</p> <p>参加ミュージシャンは多彩です。2007年生まれのピアニスト、エミル・ヴェラー（公演当日10歳！）や、今年エルフマンの『ヴァイオリン協奏曲』をリリースしたことも話題の超絶技巧ヴァイオリニスト、サンディ・キャメロン。そして芸達者な大勢の歌手たちや、さまざまな民族アンサンブルによる、エルフマンの美しい音楽をお楽しみください。</p> <p>また、『シザー・ハンズ』組曲では、ウィーン国立歌劇場バレエ団出身のスター・ダンサー、ハンナー・キケルトとヤコブ・ファイアークが客席に登場。ファイアークは映画でジョニー・デップが演じた主人公エドワードの奇怪なメイクで踊って幻想的な雰囲気を作り出しています。</p> <p>[演目] ジャスティン・ハーウィッツ：映画『ラ・ランド』メドレー、アラン・メンケン：映画『美女と野獣』メドレー、ハリー・グレッグソン＝ウィリアムズ：映画『ナルニア国物語』組曲、ジェリー・ゴールドスミス：映画『ムーラン』組曲、植松伸夫：『ファイナルファンタジーVIII』～Liberi Fatali、パン・A・P・カチュムレク：映画『ネバーランド』～ピエール・ヴァリエーション・イン・ブルー、マイケル・ダナ：映画『ライオンキング』～バイのララバイ、ハンズ・ジマー/リボ M・エルトン・ジョン：映画『ライオン・キング』メドレー、ジャスティン・ハーウィッツ：映画『ラ・ランド』～オーデション（フールズ・フード・ドリーム）、ダニー・エルフマン：メドレー【映画『黒馬物語』～映画『ミルク』～映画『メン・イン・ブラック』～映画『アベンジャーズ：エイジ・オブ・ウルトロン』】、ダニー・エルフマン：映画『ジャック・サマーズピー』組曲/『アリス・イン・ワンダーランド』テーマ曲/映画『ナイトメア・ビフォア・クリスマス』～ハロウィーン・タウンへようこそ/映画『シザー・ハンズ』組曲/映画『バットマン』組曲/映画『ザ・シンパソンズ』組曲/映画『クリスマス』組曲/映画『ナイトメア・ビフォア・クリスマス』～クリスマスって？、マックス・スタイナー：『風と共に去りぬ』～タラのテーマ【指揮】ジェイムズ・シエアマン、ジョン・マウチエリ【演奏】ウィーン放送交響楽団、サンディ・キャメロン（ヴァイオリン）エミル・ヴェラー（ピアノ）フランティシエック・ヤーンシユカ（ピアノ）アラチア・サンライ</p>



番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
ブッシュ・トリオ「ドヴォルザーク：ピアノと弦楽のための室内楽曲全集」Vol.1	4,4,6,6,1 2,12,16, 16,22,22 ,24,24,2 8,28	イギリスの気鋭のアンサンブル、ブッシュ・トリオによる、得意のドヴォルザーク・プロ。3曲のトリオで瑞々しく熱気に満ちた演奏を聴かせる。	<p>2012年に結成されたブッシュ三重奏団は、ヴァイオリンのマティウ・ファン・ベレン、チェロのオリ・エプスタイン、ピアノのオムリ・エプスタインにより、ロンドンで結成されました。団体名は、20世紀前半に活躍した名ヴァイオリニスト、アドルフ・ブッシュの所有していたグァグニエーニの名器を使用していることから、その名を冠しました。かつてはそのアドルフ・ブッシュ自身もトルドー・ゼルキンとヘルマン・ブッシュと共に「ブッシュトリオ」として名録音を残していますが、21世紀の若きトリオは結成直後からその名に恥じない高水準の演奏を実現し、世界的に活躍しています。彼らは2015年に「ドヴォルザーク：ピアノと弦楽のための室内楽曲全集」のCD録音を行い、熱気と情感あふれる好演をリリースしています。その好評もあり、2018年、同じ会場と同じゲストプレイヤーと共に、同じ演目のライブ映像収録を行いました。配置が珍しく、なんと3人お互いが向き合い、小空間で取り囲む聴衆に背を向ける形をとっています。</p> <p>ベルギーのエリザベト王妃音楽院のホールでの3公演のうち、初日はピアノ三重奏曲を3曲。演奏会は第1・4・3番の順番でしたが、映像は逆順の第3・4・1番です。ドヴォルザークとしては異例なほどの暗い情念に覆われた大作である第3番では、40歳を超えた作曲家の思いを汲んだ、美しくも力強い熱演が繰り広げられます。「ドムスキー」として知られる第4番は、全6楽章が組曲のように自由な音楽で構成される、かなりユニークな作品です。オムリの奏でるヤマハ製ピアノの美しさは特筆もので、特に第3楽章冒頭の静謐な感動はめったに味わえないもの。ノールなチェロ、情熱を前面に出すヴァイオリンとの絶妙なバランスも彼ら独特の味わいで、目まぐるしく変化する情景を楽しめる快演になりました。第1番は古典的な形式と朗らかな旋律が融合した佳品で、3人の丹念な演奏で味わえます。</p> <p>[演目] アントニン・ドヴォルザーク：ピアノ三重奏曲第3番へ短調op.65ピアノ三重奏曲第4番ホ短調op.90「ドムスキー」ピアノ三重奏曲第1番変ロ長調op.21 [演奏] ブッシュ・トリオ【マティウ・ファン・ベレン（ヴァイオリン）オリ・エプスタイン（チェロ）オムリ・エプスタイン（ピアノ）】 [収録] 2018年6月19日 ベルギー ワーテルロー（ウォーターロー）、エリザベト王妃音楽院[映像監督] フレデリック・ドレスク</p>
ブッシュ・トリオ「ドヴォルザーク：ピアノと弦楽のための室内楽曲全集」Vol.2	4,4,6,6,1 2,12,16, 16,22,22 ,24,24,2 8,28	気鋭のブッシュ・トリオと、俊英とベテランのゲスト2人による、最高水準のドヴォルザークを。2つのピアノ五重奏曲を最高の演奏で体験できる好機。	<p>2012年に結成されたブッシュ三重奏団は、ヴァイオリンのマティウ・ファン・ベレン、チェロのオリ・エプスタイン、ピアノのオムリ・エプスタインにより、ロンドンで結成されました。団体名は、20世紀前半に活躍した名ヴァイオリニスト、アドルフ・ブッシュの所有していたグァグニエーニの名器を使用していることから、その名を冠しました。結成直後から高水準の演奏を実現し、世界的に活躍する俊英アンサンブルです。彼らは2015年に「ドヴォルザーク：ピアノと弦楽のための室内楽曲全集」のCD録音を行い、熱気と情感あふれる好演をリリースしています。その好評もあり、2018年、同じ会場と同じゲストプレイヤーと共に、同じ演目のライブ映像収録を行いました。</p> <p>エリザベト王妃音楽院ホールでの3公演の中日は、五重奏曲を中心に、ロシア出身の若きヴァイオリン奏者マリア・ミルシテインと、フランス出身でイザイ弦楽四重奏団のヴィオラ奏者ミゲル・ダ・シルヴァが加わりました。配置は弦の4人がピアノの方を向いて円陣になると珍らしいもの。</p> <p>最初の「バガテル」はヴァイオリン2人、チェロ、ピアノという珍しい編成で演奏される、音楽の喜びあふれる小品組曲です。続く2つのイ長調のピアノ五重奏曲は、ベテランのヴィオラが加わり、熱気と繊細さを兼ね備えた演奏になりました。第1番は31歳の年、作曲家としては初期の作品で、演奏機会の少ない佳品ですが、その貴重な好演が展開されます。第2番は46歳の年の作で、「ドヴォルザークのピアノ五重奏曲」といえばこの曲という人気作で、キャッチーな旋律美と圧巻の高揚感をもつ名曲中の名曲です。5人それぞれの個性と名技が発揮されながら、合奏の一体感も見事。第2楽章のピアノの美音とダ・シルヴァのヴィオラの深い美音と歌心は特筆もの。第1楽章は雄大で完成度抜群、第3・4楽章のスピード感は楽しさ満点。作品の魅力を存分に示した、見応え十分の名演です。</p> <p>[演目] アントニン・ドヴォルザーク：バガテルop.47ピアノ五重奏曲第1番イ長調op.5ピアノ五重奏曲第2番イ長調op.81 [演奏] ブッシュ・トリオ【マティウ・ファン・ベレン（ヴァイオリン）オリ・エプスタイン（チェロ）オムリ・エプスタイン（ピアノ）】ミゲル・ダ・シルヴァ（ヴィオラ）マリア・ミルシテイン（ヴァイオリン） [収録] 2018年6月21日 ベルギー ワーテルロー（ウォーターロー）、エリザベト王妃音楽院[映像監督] フレデリック・ドレスク</p>
ブッシュ・トリオ「ドヴォルザーク：ピアノと弦楽のための室内楽曲全集」Vol.3	4,4,6,6,1 2,12,16, 16,22,22 ,24,24,2 8,28	ヴェテランの域に達した円熟とみずみずしい情熱と。2019年のバリの春を彩った「ラフマニノフの週末」は、二人の俊英ピアニストを迎えての濃厚に薫る協奏曲の祭典！	<p>2019年の春、ピアノ協奏曲を中心に、「ウィークエンド・ラフマニノフ」と題してバリーで開催されたラフマニノフ特集という注目プログラム。その第2日目の模様をお届けします。ロシア音楽界期待のスタニスラフ・コチャノフスキーがバリー管弦楽団を指揮し、1972年生まれのニコライ・ルガンスキー、1990年生まれのベゾド・アブドゥライモフという2世代の俊英をソリストに迎えた贅沢な協奏曲の祭典です。演奏されたのは、セルゲイ・ラフマニノフのピアノ協奏曲第1番、第2番と、『バガニエーニの主題による狂詩曲』。</p> <p>まず登場するのは、モスクワ生まれで1994年のチャイコフスキー国際コンクール最高位（1位なしの2位）のニコライ・ルガンスキー。ラフマニノフは彼が最も高い評価を得ているレパートリーで、そのクールで正確無比なタッチから繰り出される、鋭い切れ味が、わたしたち聴き手の興奮を誘います。</p> <p>ピアノ協奏曲第1番は、モスクワ音楽院の卒業作品として書かれたラフマニノフの初期作品です。人気面では第2番や第3番に一步譲るかもしれませんが、現在演奏されているのは、初稿版が書かれてからおよそ四半世紀後に、作曲家としての地位を確立したラフマニノフによって大幅に改訂されたヴァージョンということもあり、若々しい楽想と成熟した書法が同居する充実作となっています。</p> <p>続いて、ラフマニノフの代名詞ともいえるピアノ協奏曲第2番で登場するのは、ウズベキスタン出身のベゾド・アブドゥライモフです。収録当時28歳の彼は、現在躍進中の注目株。ラフマニノフは、グルギエフとの共演盤も話題になっている得意のレパートリーです。ルガンスキーとは対照的に、ラフマニノフの濃厚なロマンティズムに素直に身を委ねるような情熱的な演奏スタイルに引き込まれます。</p> <p>交響曲第1番が酷評されたショックで長いスランプに苦しんでいたラフマニノフが、心理療法によって復調し、その復活ののろとなったエピソードでも有名なピアノ協奏曲第2番。とうとうと流れる雄弁なメロディと、これでもかと連発する超絶技巧が聴く者を圧倒する20世紀の名曲です。</p> <p>そして再びルガンスキーが登場して、ラフマニノフ晩年の名曲『バガニエーニの主題による狂詩曲』。有名な第18変奏はじめ、たった一つの主題による変奏から変幻自在な表情を生み出したラフマニノフの技巧に、何度聴いてもため息の出る傑作です。</p> <p>指揮者のスタニスラフ・コチャノフスキーは、1981年サンクトペテルブルク生まれのロシア期待の星。地元のエミロフスキー劇場（マールイ劇場）でみっちり経験を積み、目下、オペラとコンサートの両輪で欧米の劇場・オーケストラから引っ張りだこの存在です。グスターボ・ドゥダマルと同年ですから、今後20年、30年と音楽界をリードしていくであろう次代の巨匠候補の一人。ここでの協奏曲のサポートでも、誇張のない、真摯で自然なアプローチの音楽作りが伝わってきて、今後も目が離せない指揮者であることは間違いありません。</p> <p>[曲目] セルゲイ・ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第1番嬰へ短調op.1＊ピアノ協奏曲第2番ハ短調op.18＊子守歌（アンコール、チャイコフスキー/ラフマニノフ編）＊バガニエーニの主題による狂詩曲op.43＊前奏曲嬰ハ短調op.3-2（アンコール）＊ [ピアノ] ニコライ・ルガンスキー＊、ベゾド・アブドゥライモフ＊＊[指揮] スタニスラフ・コチャノフスキー [管弦楽] バリー管弦楽団 [収録] 2019年4月28日、フィルハーモニー・ド・パリ [映像監督] イザベル・スーラル</p>

番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
ベルチャ四重奏団『ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第15番』	4,4,27,27,31,31	新時代を疾走する弦楽四重奏団として、今世界的に最も注目されるベルチャ四重奏団は、ルーマニア人の女性ヴァイオリニスト、コリーナ・ベルチャとポーランド人男性ヴィオラ奏者、クシユトフ・ホジェルスキーを中心に、1994年英国国王立音楽大学で結成。	<p>大阪国際室内コンクールとボルドー国際弦楽四重奏コンクールに優勝し、以来トントン拍子にキャリアを重ね、英国をベースとする弦楽四重奏団では最も名前が売れた若手弦楽四重奏団として高い人気を誇る。ベートーヴェンの弦楽四重奏曲は、作曲家が30歳前後から死の前年まで書かれた全16曲と単一章章の独立した作品として出版された『大フーガ』をあわせて、室内楽史上に君臨する比類なき傑作であり、ベートーヴェンの全創作を支える最も重要な柱といえるもの。そして弦楽四重奏曲全曲からはベートーヴェンの芸術と苦悩を知ることができる。</p> <p>この番組は、ベルチャ四重奏団がウィーン・コンツェルトハウスで12日間という短い期間で全曲を演奏した画期的なコンサートの記録。彼らが師事したアルバン・ベルク四重奏団以来のベートーヴェン弦楽四重奏曲全曲映像であり、やはり彼らが師事したアマデウス四重奏団同様、第13番を、『大フーガ』を最終楽章にした初演版と、ベートーヴェンが死の直前に作曲した新たな最終楽章による出版社版の両方を弾いていることも特徴。つまり、この全集は、本当の意味で、ベートーヴェン弦楽四重奏曲全曲を網羅した映像なのだ。</p> <p>現代の弦楽四重奏団らしいヴィヴィッドな響きと桁外れなテクニック、興奮せざるを得ない4声の戦いのような、しかし抜群にコントロールされたアンサンブル、そして沸々とたぎる名曲そのものに、血肉を、生々しい命を吹き込む情熱。脳が活発に活動し、心地よい疲労と音楽に酔いしれる喜び。まさに21世紀のベートーヴェン弦楽四重奏曲の姿がここにある。弦楽四重奏は映像でこそ、その面白さが初めてわかるのだ。</p> <p>[演出] ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第15番イ短調 Op.132  [演奏] コリーナ・ベルチャ（第1ヴァイオリン） アクセル・シャハー（第2ヴァイオリン） クシユトフ・ホジェルスキー（ヴィオラ） アントワーン・レデルラン（チェロ）  [収録] 2012年5月8日、ウィーン・コンツェルトハウス [映像監督] フレデリック・テレク  ■約47分</p>
ホーネックの「オデオンスプラッツ・コンサート2017」グルービンガーを迎えて	1,1,9,9,12,12,17,17,20,20,25,25,28,28	夏のミュンヘンの風物詩オデオンスプラッツ・コンサート。旧市街に響く、鮮烈な超絶パーカッションと、めくるめく舞曲の夕べ！	<p>毎年7月に、ミュンヘン旧市街のオデオン広場で開かれる「オデオンスプラッツ・コンサート」は、地元のバイエルン放送交響楽団とミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団が1日ずつ受け持つ鱗次な週末のイベント。そのミュンヘンの夏の風物詩から、世界的マルチ・パーカッショニスト、マルティン・グルービンガーが出演した2017年のコンサートの模様をお届けします。指揮はマンフレート・ホーネック、管弦楽はバイエルン放送交響楽団。オデオン広場はミュンヘンの観光名所のひとつで、バイエルン国立歌劇場から歩いて数分、バイエルン放送交響楽団の本拠ヘラクレス・ザールのある旧王宮のレジデンスとテアターナー教会にはさまれて位置しています。コンサートのステージとなっている「フェルトヘルンバル（将軍堂）」は、ローマ神殿風ですが、19世紀前半に、ルートヴィヒ1世の市街開発により建てられた建築です。コンサート前半は、打楽器奏者のマルティン・グルービンガーを迎えての協奏曲集です。1983年ザルツブルク生まれのグルービンガーは、ソロや協奏曲、主宰するパーカッション・アンサンブルによる室内楽など、打楽器のさまざまなプロジェクトに参加している気鋭の超絶技巧マルチ・パーカッショニスト。ここでは3曲の打楽器協奏曲を披露しています。中国のタン・ドゥン（1957～）の『自然の涙（The Tears of Nature）』は、2012年にグルービンガーが初演した作品。世界の異なる国で起こった3つの自然災害を題材にした全3楽章から成り、当コンサートで演奏している第1楽章「夏」は、2008年5月に起こった四川大地震の記憶に着想を得た作品です。アメリカのジョン・コリアーノ（1938～）の『奇術師』は、2007年にアメリカの盲目の女性打楽器奏者エリヴ・グレイニーのために作曲された協奏曲。独奏打楽器を素材に分けた3つの楽章で構成されており、ここで演奏される第2楽章「メタル」は、チューブラー・ベルとワイプラフォンを中心にした金属製打楽器のための協奏曲です。ブルーノ・ハルトル（1963～）は元ウィーン・フィルの首席ティンパニ奏者という作曲家。ウィーン生まれでウィーン少年合唱団出身という生粋のウィーンの音楽家で、1984年に楽団史上最年少のティンパニ奏者としてウィーン・フィルに入団、30年以上にわたって首席奏者として活躍しました。彼の打楽器協奏曲について指揮者のマンフレート・ホーネックは以前、アルノルト・シェーンベルクやアルバン・ベルクら新ウィーン楽派の影響が見られる第1楽章と、ストラヴィンスキーに十二音技法の影響がミックスされた第2楽章で構成された作品と説明しています。シリアスな現代作品による前半から一転、コンサート後半は一転してワルツなどの「舞曲」をキーワードにした粋なプログラム。開演時間の午後8時はまだ真昼のように明るく初夏のミュンヘンも、後半には夕闇に包まれて、ステージは幻想的な照明で照らされます。ウィーン・フィルのニュー・イヤ・コンサートでもおなじみのオペラ作曲家カール・ミヒャエル・ツィラーのワルツ「いらっやいませ」でスタート。指揮者ホーネックが編曲したアントン・ドヴォルザークの歌劇『ルサルカ』によるオーケストラ組曲は軽快な「ボロネーズ」で始まります。もちろん名アリア「月に寄せる歌」も、ヴァイオリン独奏で切々と歌われます。そしてメインはドミートリイ・ショスタコーヴィチの『ステージ・オーケストラのための組曲』。有名な「ワルツ第2番（セカンド・ワルツ）」はじめ、どこかレトロで懐かしいメロディをたっぷりとお楽しみください。</p> <p>[演奏] マルティン・グルービンガー（打楽器） * マンフレート・ホーネック（指揮） バイエルン放送交響楽団  [曲目] タン・ドゥン：打楽器協奏曲『自然の涙（The Tears of Nature）』～第1楽章「夏」*ジョン・コリアーノ：打楽器協奏曲『奇術師（Conjurer）』～第2楽章「メタル」*ブルーノ・ハルトル：打楽器協奏曲 op.23 *カール・ミヒャエル・ツィラー：ワルツ「いらっやいませ」op.518～喜歌劇『財務責任者』よりアントン・ドヴォルザーク（マンフレート・ホーネック編曲）：ルサルカ幻想曲（歌劇『ルサルカ』による組曲）ドミートリイ・ショスタコーヴィチ：ステージ・オーケストラのための組曲より～行進曲/リリック・ワルツ/ダンス第2番/ワルツ第2番/小さなボリカノフィナーレロイ・アンダーソン：タイプライター（アンコール）*リチャード・シュトラウス：歌劇『ボロネーズ』組曲より [収録] 2017年7月15日 ミュンヘン、オデオン広場 [映像監督] エリザベト・マルツナー</p>
ボコリチのショパン『夜想曲第16番』	14,14,16,16,18,18,22,22		<p>[演出] フレデリック・フランソワ・ショパン：夜想曲第16番ホ長調Op.55-2 [ピアノ] イーヴォ・ボコリチ [収録] 1987年4月～5月レアー・ディ・ラッコネジ城（トリノ近郊） [映像監督] ホラント・H・ホールフェルト  ■約9分</p>
ヤルヴィのシューマン『ライン』	6,6,8,8,21,21,30,30	プレーメンのライブハウスで行われたヤルヴィとドイツ・カンマーフィルのシューマン交響曲ツィクルスより、ライン川とケルン大聖堂に触発された第3番。	<p>2015年よりNHK交響楽団常任指揮者を務めるパーヴォ・ヤルヴィと手兵ドイツ・カンマー・フィルハーモニー管弦楽団のシューマン交響曲ツィクルスより第3番『ライン』。会場は、オーケストラの地元プレーメンではロックコンサートに使われるライブハウス「ピール2（PIER2）」。</p> <p>4曲ある交響曲の最後に作曲された『ライン』は、デュッセルドルフの音楽監督に招かれたシューマンがライン川とケルン大聖堂にインスピレーションを受けたとされています。特に5楽章構成の中で、ケルン大聖堂の厳肅な雰囲気と認められる第4楽章は異色。</p> <p>颯爽としたテンポ、強調されたアクセントやメリハリをついたフレーズなど、常に新しい発想で古典に新たな光を当てるヤルヴィの現代的センスと音楽作りがスリリング。第1楽章の大河のような怒涛のサウンド、第2楽章と第3楽章の穏やかな響き、一転して第4楽章の厳肅さ、しかし決して留まることのない音楽の流れは第5楽章の祝祭的な盛り上がりへと続きます。</p> <p>“クラシックはロック好きでも楽しめる”“コンサートホールよりもカメラワークが自由自在”という彼のコンセプトで収録された映像も、最高にスタイリッシュでカッコいい。クラシックの王道といえるシューマンの交響曲なのに、まるで新しい曲に出会ったような昂揚感と感動が味わえます。</p> <p>[演出] ロベルト・アレクサンダー・シューマン：交響曲第3番変ホ長調Op.97『ライン』 [指揮] パーヴォ・ヤルヴィ [演奏] ドイツ・カンマー・フィルハーモニー管弦楽団 [収録] 2012年ピール2（プレーメン） [映像監督] クリスティアン・ベルガー  ■約37分</p>

番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
ヤルヴィのシューマン『交響曲第2番』	6,6,8,8,2 1,21,30, 30	プレーメンのライブハウスで行われたヤルヴィとドイツ・カンマーフィルのシューマン交響曲ツイクルスより、最高にスタイリッシュな映像で収録した第2番。	2015年よりNHK交響楽団常任指揮者を務めるバーク・ヤルヴィと手兵ドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団のシューマン交響曲ツイクルスより第2番。会場は、オーケストラの地元プレーメンではロックコンサートに使われるライブハウス「ピール2（PIER2）」。 4曲ある交響曲の実演3番目にあたる第2番は、シューマンが次第に精神障害に悩まされる中で完成されました。第2楽章は最高難度の楽曲として、オーケストラの入団オーディションの課題曲としてよく使われるそうです。 雄爽としたテンポ、強調されたアクセントやメリハリのついたフレージングなど、常に新しい発想で古典に新たな光を当てるヤルヴィの現代的センスと音楽作りがスリリング。第1楽章のバルスのようなリズムの強調、第2楽章の狂気のような疾走感はヤルヴィならでは。そして彼自身「最上の美しさ」と語る第3楽章から、第4楽章の興奮と高揚感は圧巻です。 “クラシックはロック好きでも楽しめる”“コンサートホールよりもカメラワークが自由自在”という彼のコンセプトで収録された映像も、最高にスタイリッシュでカッコいい。クラシックの王道といえるシューマンの交響曲なのに、まるで新しい曲に出会ったような昂揚感と感動が味わえます。  [演目]ロベルト・アレクサンダー・シューマン：交響曲第2番ハ長調Op.61[指揮]バーク・ヤルヴィ[演奏]ドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団[収録]2012年ピール2（プレーメン）[映像監督]クリスティアン・ベルガー ■約42分
ヤルヴィのシューマン『交響曲第4番』	6,6,8,8,2 1,21,30, 30	プレーメンのライブハウスで行われたヤルヴィとドイツ・カンマーフィルのシューマン交響曲ツイクルスより、2番目に作曲された第4番。疾走するスピードは圧巻。	2015年よりNHK交響楽団常任指揮者を務めるバーク・ヤルヴィと手兵ドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団のシューマン交響曲ツイクルスより第4番。会場は、オーケストラの地元プレーメンではロックコンサートに使われるライブハウス「ピール2（PIER2）」。 4曲の交響曲の中で、実は2番目に作曲された第4番。1841年に初演されましたが、10年後の改訂版が最後に出版されたため、この番号になっています。 雄爽としたテンポ、強調されたアクセントやメリハリのついたフレージングなど、常に新しい発想で古典に新たな光を当てるヤルヴィの現代的センスと音楽作りがスリリング。妻クララに捧げられた楽想が次々と展開。特に第2楽章のチェロとオーボエのデュエットとヴァイオリン・ソロは美しい。疾走するフィナーレのスピード感は圧巻。 “クラシックはロック好きでも楽しめる”“コンサートホールよりもカメラワークが自由自在”という彼のコンセプトで収録された映像も、最高にスタイリッシュでカッコいい。クラシックの王道といえるシューマンの交響曲なのに、まるで新しい曲に出会ったような昂揚感と感動が味わえます。  [演目]ロベルト・アレクサンダー・シューマン：交響曲第4番二短調Op.120[指揮]バーク・ヤルヴィ[演奏]ドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団[収録]2012年ピール2（プレーメン）[映像監督]クリスティアン・ベルガー ■約35分
ヤルヴィのシューマン『春』	6,6,8,8,2 1,21,30, 30	プレーメンのライブハウスで行われたヤルヴィとドイツ・カンマーフィルのシューマン交響曲ツイクルスよりシューマン最初の交響曲の、最高にスタイリッシュな映像。	2015年よりNHK交響楽団常任指揮者を務めるバーク・ヤルヴィと手兵ドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団のシューマン交響曲ツイクルスより第1番。会場は、オーケストラの地元プレーメンではロックコンサートに使われるライブハウス「ピール2（PIER2）」。 シューマンがクララ・ヴィークと結婚した1840年の翌年、アドルフ・バトガーの『春の詩』に刺激されて作曲された第1番『春』。標題とおり、当初は各楽章に「春の始まり」「たそがれ」「楽しい遊び」「春たけなわ」というタイトルが付けられていたそうです。 雄爽としたテンポ、強調されたアクセントやメリハリのついたフレージングなど、常に新しい発想で古典に新たな光を当てるヤルヴィの現代的センスと音楽作りがスリリング。第1楽章の元気凛冽な明るさ、のどかだが推進する第2楽章からリズムカルなスケルツォの第3楽章へ、そして第4楽章のフィナーレに至る生氣あふれる音楽は見応え十分。 “クラシックはロック好きでも楽しめる”“コンサートホールよりもカメラワークが自由自在”という彼のコンセプトで収録された映像も、最高にスタイリッシュでカッコいい。クラシックの王道といえるシューマンの交響曲なのに、まるで新しい曲に出会ったような昂揚感と感動が味わえます。  [演目]ロベルト・アレクサンダー・シューマン：交響曲第1番変ロ長調Op.38『春』[指揮]バーク・ヤルヴィ[演奏]ドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団[収録]2012年ピール2（プレーメン）[映像監督]クリスティアン・ベルガー ■約36分
ヤルヴィのベートーヴェン『運命』	5,5,8,8,2 1,21,30, 30	2009年ベートーヴェン音楽祭で話題を集めたヤルヴィとドイツ・カンマーフィルのベートーヴェン交響曲全曲演奏会より、音楽史上最も有名な交響曲第5番。	2009年に第11回を迎えたボンの「ベートーヴェン・フェスト」で最も話題を集めた、バーク・ヤルヴィとドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団によるベートーヴェン交響曲全曲演奏会より、9月10日ベートーヴェンホールで行われた交響曲第5番『運命』のライブ映像。 冒頭の「ダダダ・タン」を指してベートーヴェンが「運命はこのような戸を叩くのだ」と語ったと伝えられる『運命』は、音楽史上最も有名な交響曲の一つ。 古典に新たな光を当てたヤルヴィとドイツ・カンマーフィルの鮮烈さ、その興奮と躍動は、映像だからこそよくわかる。ヤルヴィを見ずして現代のベートーヴェン演奏は語れない。  [演目]ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：交響曲第5番ハ短調Op.67『運命』[指揮]バーク・ヤルヴィ[演奏]ドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団[収録]2009年9月10日ベートーヴェンホール（ボン）「ベートーヴェンフェスト・ボン」[映像監督]クリスティアン・クルト・ワイズ ■約36分
ヤルヴィのベートーヴェン『英雄』	5,5,8,8,2 1,21,30, 30	2009年ベートーヴェン音楽祭で話題を集めたヤルヴィとドイツ・カンマーフィルのベートーヴェン交響曲全曲演奏会より、ナポレオンのエピソードで知られる第3番。	2009年に第11回を迎えたボンの「ベートーヴェン・フェスト」で最も話題を集めた、バーク・ヤルヴィとドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団によるベートーヴェン交響曲全曲演奏会より、9月9日ベートーヴェンホールで行われた交響曲第3番『英雄』のライブ映像。 『英雄』は、ナポレオンを賛美するために作曲され、彼が皇帝に即位するとベートーヴェンは激怒のあまり献辞が書かれた表紙を破り捨てたというエピソードが有名な交響曲の傑作。 古典に新たな光を当てたヤルヴィとドイツ・カンマーフィルの鮮烈さ、その興奮と躍動は映像だからこそよくわかる。ヤルヴィを見ずして現代のベートーヴェン演奏は語れない。  [演目]ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：交響曲第3番変ホ長調Op.55『英雄』[指揮]バーク・ヤルヴィ[演奏]ドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団[収録]2009年9月9日ベートーヴェンホール（ボン）「ベートーヴェンフェスト・ボン」[映像監督]クリスティアン・クルト・ワイズ ■約50分

番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
ヤルヴィのベートーヴェン『交響曲第1番』	5,5,8,8,2 1,21,30, 30	2009年ベートーヴェン音楽祭で話題を集めたヤルヴィとドイツ・カンマーフィルのベートーヴェン交響曲全曲演奏会より、作曲家が29歳頃の第1番の鮮烈な演奏。	2009年に第11回を迎えたボンの「ベートーヴェン音楽祭」で最も話題を集めた、パーヴォ・ヤルヴィとドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団によるベートーヴェン交響曲全曲演奏会より、9月9日ベートーヴェンハレで行われた交響曲第1番。 交響曲第1番はベートーヴェン29歳頃の作品で、ハイドンやモーツァルトなどの影響からの脱却を試みていた時期の意欲作。 古典に新たな光を当てたヤルヴィとドイツ・カンマーフィルの鮮烈さ、その興奮と躍動は映像だからこそよくわかる。ヤルヴィを見ずして現代のベートーヴェン演奏は語れない。  [演目] ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：交響曲第1番ハ長調Op.21 [指揮] パーヴォ・ヤルヴィ [演奏] ドイツ・カンマー・フィルハーモニー管弦楽団 [収録] 2009年9月9日ベートーヴェンハレ（ボン）「ベートーヴェンフェスト・ボン」 [映像監督] クリティアン・クルト・ワイズ ■約28分
ヤルヴィのベートーヴェン『交響曲第2番』	5,5,8,8,2 1,21,30, 30	2009年ベートーヴェン音楽祭で話題を集めたヤルヴィとドイツ・カンマーフィルのベートーヴェン交響曲全曲演奏会より、作曲家が絶望から再起した直後の第2番。	2009年に第11回を迎えたボンの「ベートーヴェン・フェスト」で最も話題を集めた、パーヴォ・ヤルヴィとドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団によるベートーヴェン交響曲全曲演奏会より、9月9日ベートーヴェンハレで行われた交響曲第2番のライブ映像。 交響曲第2番は有名な「ハリゲンシュタットの遺書」が書かれ絶望から再起した直後に完成した初期の代表作の一つ。 古典に新たな光を当てたヤルヴィとドイツ・カンマーフィルの鮮烈さ、その興奮と躍動は映像だからこそよくわかる。ヤルヴィを見ずして現代のベートーヴェン演奏は語れない。  [演目] ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：交響曲第2番二長調Op.36 [指揮] パーヴォ・ヤルヴィ [演奏] ドイツ・カンマー・フィルハーモニー管弦楽団 [収録] 2009年9月9日ベートーヴェンハレ（ボン）「ベートーヴェンフェスト・ボン」 [映像監督] クリティアン・クルト・ワイズ ■約36分
ヤルヴィのベートーヴェン『交響曲第4番』	5,5,8,8,2 1,21,30, 30	2009年ベートーヴェン音楽祭で話題を集めたヤルヴィとドイツ・カンマーフィルのベートーヴェン交響曲全曲演奏会より、鮮烈な躍動感が映像でよくわかる第4番。	2009年に第11回を迎えたボンの「ベートーヴェン・フェスト」で最も話題を集めた、パーヴォ・ヤルヴィとドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団によるベートーヴェン交響曲全曲演奏会より、9月10日ベートーヴェンハレで行われた交響曲第4番のライブ映像。 交響曲第4番はベートーヴェンがゴッセフィネー・フォン・ダイム伯爵未亡人との恋愛が最高潮に達していた頃の作品。 古典に新たな光を当てたヤルヴィとドイツ・カンマーフィルの鮮烈さ、その興奮と躍動は映像だからこそよくわかる。ヤルヴィを見ずして現代のベートーヴェン演奏は語れない。  [演目] ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：交響曲第4番変ロ長調Op.60 [指揮] パーヴォ・ヤルヴィ [演奏] ドイツ・カンマー・フィルハーモニー管弦楽団 [収録] 2009年9月10日ベートーヴェンハレ（ボン）「ベートーヴェンフェスト・ボン」 [映像監督] クリティアン・クルト・ワイズ ■約37分
ヤンソンス&ウィーン・フィル定期公演2017	19,19,24 ,24,29,2 9	剛と柔が理想的にかみ合い、自然の息吹やドラマが生まれる……。逝去が惜しまれる大指揮者ヤンソンスとウィーン・フィルによる貴重な定期公演ライブ。	2019年、ラトヴィア出身の大指揮者マリス・ヤンソンスが逝去したことは多くのファンを悲しませました。天下の名門ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団（VPO）にとってもヤンソンスは信頼する常連客演指揮者で、当番組は2017年に行われたVPO定期公演におけるこのコンビの演奏です。 名匠の強力な統率力によって剛・柔・豪快・繊細・重厚・軽妙のコントラストがきつきりとなれ、VPOはそれを難なく音にして音楽の海を自在に泳ぎます。ヤンソンスから受け取る剛や優しさを滲ませながら。 1曲目はドヴォルザークの交響曲第8番、なんと自然の息吹と情にあふれる曲でしょうか。ホヘミアの風の音、鳥の音が聴こえ、草木の香りが立ちのぼり、またそこで素朴に生きる人の心を感じさせます。第3楽章の中間部をはじめ、弦のみずみずしく豊潤な響きはVPOならではの、第2楽章の木管の小技的な面白いアーティキュレーションも興味にならず実に自然。 次のR.シュトラウス『死と変容』では、針の穴を通すような緊張感の強いピアノが聴き手の耳をそばだたせ、壮麗なフォルティシモまで指揮者と楽団が一丸となって広大なレンジを形成します。病の床にいる者がりとときの夢を見るも、苦痛との壮絶な闘いのち最後は浄化する……というストーリーで、この作曲家の本領であるオペラのような音楽は、演奏によっては表層的なドラマに陥ってしまうところですが、この演奏は切実さが音楽に宿り深い感動を与えてくれます。コンサートマスターのライナー・ホーネック、また木管のソロは胸にみ入る聴きもの。 ヤンソンスの十八番のひとつ、ストラヴィンスキー『火の鳥』でも、マエストロの“剛”とVPOの“柔”が一段と理想的にかみ合い、ロシアの天才作曲家の若き日の名作をダイナミックに、エキゾチックに、品のよい色彩感あふれる華麗なものにしています。この曲でも随所に聴かれるVPO木管奏者の妙技が牙え、静かなナンバーはもちろんなこと、全体としてもロシアのオーケストラとはひと味違う、VPO特有の豊かに歌う流儀に寄っているのが印象的です。  [指揮] マリス・ヤンソンス [演奏] ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 [曲目] アントニーン・ドヴォルザーク：交響曲第8番ト長調Op.88リヒャルト・シュトラウス：交響詩『死と変容』Op.24イーゴリ・ストラヴィンスキー：バレエ『火の鳥』組曲（1919年版） [収録] 2017年6月 ウィーン楽友協会大ホール [映像監督] ディック・カイス ■約1時間30分
ヤンソンス&バイエルン放送響『革命』in プエノスアイレス	2,2,11,1 1,17	プエノスアイレスから始まったアメリカ大陸ツアー初日、コロ劇場をソールドアウトにした首席指揮者マリス・ヤンソンスによるショスタコヴィチの交響曲第5番『革命』。	2014年5月のバイエルン放送交響楽団アメリカ大陸ツアーは南米アルゼンチンのプエノスアイレスから始まりました。この番組はその初日、コロ劇場をソールドアウトにした首席指揮者マリス・ヤンソンスによるショスタコヴィチの交響曲第5番『革命』です。1908年に開場したプエノスアイレスの文化的象徴であるコロ劇場は、立ち見を含めると約3500人収容。世界で最も美しいオペラハウスの一つと称されています。ショスタコヴィチは1936年、音楽家生命を絶たれかねない共産党批判を受けて交響曲第4番を封印。スターリン支持を表明するため、翌年のソヴィエト革命20周年記念日に発表した交響曲第5番で名誉回復に成功します。初演はエフゲニー・ムラヴィンスキー指揮しレニングラード・フィル。日本では『革命』という標題で、ショスタコヴィチ作品の中でも特に人気の高い楽曲です。ラトヴィア出身のヤンソンスはレニングラードで学び、レニングラード・フィルの指揮者も務めた巨匠。経歴からみてもわかるように、彼のショスタコヴィチは定評があり、この公演でも観客からの熱狂的称賛を獲得しました。第二次世界大戦終結後からドイツ各地で放送局自前のオーケストラの設立ラッシュが始まり、バイエルン放送響の設立は1949年。比較的歴史が浅いながら、現在ドイツのみならず世界を代表するオーケストラとして高い評価を受けています。放送局のオーケストラらしく、古典から現代音楽まで何でも演奏できる柔軟な姿勢と幅広いレパートリーが持ち味。この番組でも、ヤンソンスとの厚い信頼関係から生み出された迫力のショスタコヴィチがご覧いただけます。  [演目] ドミトリー・ショスタコヴィチ：交響曲第5番二短調Op.47『革命』／歌劇『ムツェンク郡のマクベス夫人』～間奏曲 [指揮] マリス・ヤンソンス [演奏] バイエルン放送交響楽団 [収録] 2014年5月7日コロ劇場（プエノスアイレス） [映像監督] ミハエル・ペイヤー ■約55分

番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
ヤンソンス & ラン・ラン「ジルヴェスター・コンサート 2018」	1,1,11,1 1,23,23	2019年に生涯を閉じた現代の巨匠マリス・ヤンソンスが、その前年の大晦日に手兵バイエルン放送交響楽団とともに開いた、なんともあたたいカラ・コンサート	<p>2019年11月30日（日本時間12月1日）。現代を代表する指揮者マリス・ヤンソンスの訃報が世界中を駆け巡りました。多くのメディアが伝えたこの悲しいニュースの発信元のひとつがミンヘンのバイエルン放送交響楽団でした（ただし、オケストラは12月1日没後と発表しています）。ヤンソンスが2003年から首席指揮者を務めていたドイツの名門です。番組では、亡くなる前年の2018年12月31日、大晦日にオケストラの本拠ヘラクスザールで行なわれたニューイヤー・イヴ・ガラ・コンサートの模様をお届けします。</p> <p>大晦日のジルヴェスター・コンサートは毎年世界中で数多く聞かれています。バイエルン放送交響楽団にとってはこれが初めての試みですが、その記念すべき第1回目の祝祭コンサートに首席指揮者ヤンソンスが選んだのは音楽の世界旅行。（アンコールを除く）全12曲は、ヨーロッパからアメリカ、アジアまで、一曲一曲すべて異なる国々の作曲家の作品で構成された楽しいプログラムになっています。</p> <p>まず最初、このコンサートのあった2018年がメモリアル・イヤーの二人の作曲家の作品から始まります。生誕100年のアメリカのレナード・バーンスタイン「キャンディード」は、没後100年のフランスのクロード・ドビュッシー『月の光』。児童劇のために書かれたイギリスのエドワード・エルガーの『野生の熊』は楽しい音楽。フィンランドのジャン・シベルウスの仄暗い『悲しきリッツとチエコのアントニン・ドヴォルザーク「スラヴ舞曲集」』に続いて、腱鞘炎による1年以上の休養を経てこの年にカムバックしたピアニストのラン・ランが登場（この年の秋に、ウィーン・フィルとともに日本にも来ていました）。オーストリアのヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトのピアノ協奏曲第21番から夢見るような第2楽章アンダンテと、20世紀前半の、中国初の西洋クラシック音楽の作曲家の一人、冨星海の代表作『黄河協奏曲』を披露します。大きな拍手を受けてポーランドのフレデリック・ショパンの『華麗なる大円舞曲』をじつに洒脱にアンコール。日本色豊かな外山雄三のバレエ曲『幽玄』。その勇壮な和太鼓の連打とは対照的な旋律美の、イタリアのピエトロ・マスカーニの『カヴァレリア・ルスティカーナ』が心を洗うようです。コンサートは一気に終盤へ。ドイツのヨハネス・ブラームスのハンガリー舞曲集第5番とスペインのルベルト・チャビのサルスエラ『人騒がせな娘』で民族色をカラフルに描き出したあとは、ハンガリーのジェルジュ・リグティによる『ルーマニア協奏曲』。お祭りコンサートの最後がリグティなんて、カッコ良すぎます。アンコールも、ビートル・イリイチ・チャイコフスキーの『眠りの森の美女』の『バラマと』、ヨハン・シュトラウス IIの『愛の便り』と、ありきたりでない選曲。シュトラウスのギヤロップは2006年のウィーン・フィル・ニューイヤー・コンサートでも演奏していました。お気に入りの曲のひとつだったのでしょ。</p> <p>ゆく年を送る祝典ですので、若干の照明なども用いっていますが、けって華美ではなくじつに落ち着いた演出。古都ミンヘンらしい、人の心が通うあたかい雰囲気コンサートです。</p> <p>年が明けて2019年。10月から11月にかけて、ヤンソンスはこのバイエルン放送交響楽団とともにヨーロッパ7都市とニューヨークを巡る演奏旅行に出かけました。しかし体調不良のため、ヨーロッパ公演のうち後半の3公演をダニエル・ハーディングが代演。アメリカに選ってニューヨーク・カーネギーホールでの2公演のうち、1日目は指揮したものの、腕が上げられないほど体調が悪かったということで、2日目は代役のヴァシリー・ペトレンコが指揮台に立ちました。そのあと11月後半に予定されていた日本公演を含むアジア・ツアーも降板。さらにウィーン・フィルムの客演もキャンセルし、代役としてヤクフ・メルシヤがウィーン・フィル・デビューを果たしたのを見届けるように、ヤンソンスはザクトペルブルクの自宅で76歳の生涯を閉じたのでした。最後に指揮したのが現役首席指揮者を務めるバイエルン放送交響楽団だったことには、不思議な絆も感じます。</p> <p>このコンサート映像を見ていても、ヤンソンス自身が、独奏者のラン・ランやオケストラのメンバーが、そして客席の聴衆たちが、じつに柔和と穏やかな笑顔を浮かべていることが、作品や奏者に優しく自然に寄り添う彼の音楽の特徴を、ありありと物語るようです。冥福を祈ります。</p> <p>【指揮】 マリス・ヤンソンス 【演奏】 バイエルン放送交響楽団、ラン・ラン（ピアノ）  【曲目】 レナード・バーンスタイン：『キャンディード』序曲クロード・ドビュッシー：月の光（レオポルド・ストコフスキー編曲）エドワード・エルガー：付随音楽『子供の魔法の杖』Op.1より～野生の熊ジャン・シベルウス：悲しきリッツOp.44アントニン・ドヴォルザーク：スラヴ舞曲集第7番（第15番）八長調Op.72-7アヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト：ピアノ協奏曲第21番八長調K.467より～第2楽章アンダンテ冨星海：黄河協奏曲（1939年）より～第2楽章黄河賛歌フレデリック・ショパン：華麗なる大円舞曲変奏木長調Op.18（リスト・アンコール）  外山雄三：バレエ組曲『幽玄』より～男たちの踊りピエトロ・マスカーニ：歌劇『カヴァレリア・ルスティカーナ』間奏曲ヨハネス・ブラームス：ハンガリー舞曲集第5番短調（アルベルト・パーロウ編曲）ルベルト・チャビ：サ</p>
ロッシーニ・オペラ・フェスティバル40周年ガラ・コンサート	2,2,11,1 1,17	フローレスらロッシーニ歌いが勢揃い！ ロッシェニ研究と実践の最新線、ベアザロのロッシェニ・オペラ・フェスティバルが開催40周年を記念するガラ・コンサート	<p>『セビリア理髪師』や『チエネレントラ』『ギョーム・テル（ワイルド・テル）』などの代表作が世界の歌劇場で頻りに上演されて要される大オペラ作曲家のロッシーニ。しかし、じつはその一方で、全39作のオペラのうちの大半は上演の機会も少なく、長い間忘れられていた作品も少なくありません。そんな知られざるロッシーニの名作に再び光を当てているのが、1980年にロッシーニの生地ベアザロで始まった「ロッシーニ・オペラ・フェスティバル」（ROF）です。上演だけでなく、精緻な資料研究やそれに基づいた校訂版楽譜の刊行とあわせて、20世紀末からの「ロッシーニ・ルネサンス」を巻き起こした、文字どおりロッシーニの聖地です。40周年（第40回）を迎えた2019年、記念のガラ・コンサートが開かれました。</p> <p>40周年のお祝いですから、これまでのROFを背負ってきたロッシーニの名歌手たちが登場しているのは順当なところですが、現代最高のロッシーニ・テノールのファン・ディエゴ・フロレスはじめ、ミケーレ・ベルトゥージ（バス）、パオロ・ポルドーニャ（バス・バリトン）、ニコラ・アライモ（バリトン）といったROF常連の男声陣が名を連ねています。ほかに、注目のアメリカのベルカント・テノール、ローレンス・ブラウンリーや、残念ながら新型コロナウイルス感染症拡大の影響で公演中止になった2020年3月の新国立劇場『コジ・ファン・トゥッテ』でドラペラ役を歌うはずだった、躍進中のメゾ・ソプラノ、アナ・ゴリャチョワら。すでにROFで主役級を歌う注目歌手がいる一方で、アンジェラ・ミード（ソプラノ）やフランコ・ヴァッサーロ（バリトン）はROF初登場の顔ぶれ。ミードは2018年のMETの『セミアミド』でセンセーショナルな評判を巻き起こしたニュースターです。過去・現在・未来のROFを象徴するような、幅広いキャスティングと言えるでしょう。</p> <p>記念公演ながらステージは虚飾を排したシンプルな作りで、演出なしのコンサート形式。歌手たちの衣装もブラックやパープルでシックな装いです。歌唱ではやはりフロレスが格別の実績。常連組ではアライモのドン・マニエフコのアリア（チエネレントラ）にも大きな拍手が贈られ、女性陣ではゴリャチョワとミードが印象に残る歌いぶりを見せています。とくに初登場ミードの強靭な声のエルミオーネは、ROF組の歌手たちとはひと味異なるアプローチが新鮮です。そしてカルロ・リッツィ指揮のRAI国立交響楽団が、軽やかながら緻密なアプローチでロッシーニの音楽の魅力を際立たせ、じつに頼もしいサポートぶりを見せています。</p> <p>【出演】 ヴァレリア・ジラルデロ（メゾ・ソプラノ） アナ・ゴリャチョワ（メゾ・ソプラノ） アンジェラ・ミード（ソプラノ） クラウディア・ムスキーオ（ソプラノ） ニコラ・アライモ（バリトン） パオロ・ポルドーニャ（バス・バリトン） ローレンス・ブラウンリー（テノール） カルロ・チーニ（バス） ルジル・ガティン（テノール） ミケーレ・ベルトゥージ（バス） フランコ・ヴァッサーロ（バリトン）  【指揮】 カルロ・リッツィ 【管弦楽】 RAI国立交響楽団 【合唱】 ヴェンティエーティオ・バツ劇場合唱団（合唱指揮 = ジョヴァンニ・ファリナ）  【曲目】 ジョアキーノ・ロッシーニ：『セビリアの理髪師』より序曲フィガロのアリア『町の何でも屋に』（ヴァッサーロ） ハルトロのアリア『私のような偉い医者に向かって』（ポルドーニャ） 伯爵のアリア『もう逆らうのをやめろ』（ブラウンリー） 『ランスへの旅』よりメリベア侯爵夫人とリーベンスコフ伯爵のシーナと二重唱『私にどんな咎があります？ ……気高き魂を、お祈りよ！』（ゴリャチョワ &amp; ガティン） 『チエネレントラ』よりドン・マニエフコのアリア『娘のうちのどちらでも』（アライモ） ドン・ラミーロのアリア『そう、誓って彼女を見つけ出す』（フロレス） 『アルジエのイタリヤ女』より第1幕フィナーレ『殿様、離別の旅立ちに先だて』（ジラルデロ、ゴリャチョワ、ムスキーオ、ポルドーニャ、ブラウンリー、チーニ、ベルトゥージ） 『エルミオーネ』よりエルミオーネの大シーナ『彼女が勝利するなんて！ …』（ミード、ムスキーオ、チーニ、ガティン） 『ギョーム・テル』より序曲アルノールとテルの二重唱『どこに行く？ 何がお前を動揺させるのだ？』（フロレス &amp; ベルトゥージ） テルのアリア『動くな、膝を地につけて』（ヴァッサーロ） アルノールのアリア『先祖より受け継いだ住処よ』（フロレス） 第4幕フィナーレ『すべては変わり、空が晴れ渡る』（ジラルデロ、ミード、ムスキーオ、チーニ、フロレス、ベルトゥージ）  【収録】 2019年8月21日、ベアザロ、ヴィトリヴァーゴ・アレナ（ロッシーニ音楽祭ライブ） 【映像監督】 ダヴィデ・マンチニ ■ 約2時間10分</p>

番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
華麗なるオペラ・ガラ2007	1,1,11,1 1,23,23	豪華絢爛！2007年夏の最も熱いウラシク・イベントとして、ヨーロッパの話題を独占したバーデン＝バーデン祝祭劇場のオペラ・ガラ・コンサート。	<p>アンナ・ネトレブコ、エリーナ・ガランチャ、ラモン・ヴァルガス、リュドヴィク・テジエといった人気実力を兼ね備えたトップスターが、ロッシェーニ、ドニゼッティ、ヴェリーニから、フランスもの、ヴェルディ、プッチーニまで、人気オペラの有名どころを次々と歌い演じる。今回は二重唱がたがひ歌われるのも特徴的。アンコールではネトレブコが裸足で歌い踊る『ジュディッタ』が必見。観客総立ちの興奮とオペラ・ガラならではの熱気をストレートに伝える映像。</p> <p>[演出] ヴィンチェンツォ・ベリニ：歌劇『ルルマ』～序曲（シンフォニア） [演出] ヴィンチェンツォ・ベリニ：歌劇『ルルマ』～アタルジーザとルルマの二重唱「おおルルマよ、ごらんなさい」  [出演] アンナ・ネトレブコ（ルルマ/ソプラノ） エリーナ・ガランチャ（アタルジーザ/メゾ・ソプラノ） [演出] ガエターノ・ドニゼッティ：歌劇『愛の妙薬』～ネメローノのアリア「人知れぬ涙」 [出演] ラモン・ヴァルガス（ネメローノ/テノール） [演出] ヴィンチェンツォ・ベリニ：歌劇『清教徒』～リカルドのアリア「私は一体どこへ行きたい？・・・ああ、永遠にあなたを失った・・・美しく幸福な夢が」 [出演] リュドヴィク・テジエ（リカルド/バリトン） [演出] ヴィンチェンツォ・ベリニ：歌劇『ルルマ』～ルルマのアリア「清らかな女神よ・・・わたしの胸に帰れ」 [出演] アンナ・ネトレブコ（ルルマ/ソプラノ） [演出] ジャキーノ・ロッシェーニ：歌劇『チエネントラ』～チエネレントラのロンド・フィナーレ「悲しみと涙のうちに生まれて」  [出演] エリーナ・ガランチャ（チエネレントラ/メゾ・ソプラノ） [演出] ジュゼッペ・ヴェルディ：歌劇『ドン・カルロ』～ドン・カルロとロドリゴの二重唱「あれは・・・王子だ・・・われらの胸に友情を」 [出演] ラモン・ヴァルガス（ドン・カルロ/テノール、リュドヴィク・テジエ（ロドリゴ/バリトン） [演出] カミーユ・サン＝サーンス：歌劇『サムソンとデリラ』Op.47～バツカナル（ハルエ音楽） [演出] レオ・トリブ：歌劇『ラクメ』～ラクメとマカの花の二重唱「おいで、マカ・・・ジャスミンとバラの厚く群れ咲くアーチ」 [出演] アンナ・ネトレブコ（ラクメ/ソプラノ） エリーナ・ガランチャ（マカ/メゾ・ソプラノ） [演出] ジョルジュ・ビゼー：歌劇『真珠探り』～ナディールとズルガの二重唱「聖なる神殿の奥深く」 [出演] ラモン・ヴァルガス（ナディール/テノール） リュドヴィク・テジエ（ズルガ/バリトン） [演出] カミーユ・サン＝サーンス：歌劇『サムソンとデリラ』Op.47～デリラのアリア「あなたの声に心は開く」 [出演] エリーナ・ガランチャ（デリラ/メゾ・ソプラノ） [演出] ジュゼッペ・ヴェルディ：歌劇『ルイザ・ミラ』～ロドリゴのシェーナとアリア「おお、僕自身の目で見た証拠を・・・穏やかな夜には」  [出演] ラモン・ヴァルガス（ロドリゴ/テノール） [演出] ジュゼッペ・ヴェルディ：歌劇『ドン・カルロ』～ロドリゴの死「あなたを抱くことができるわたしは・・・わたしには最後の時がきた・・・私は死ぬ、けれど心は幸福感にあふれて」 [出演] リュドヴィク・テジエ（ロドリゴ/バリトン） [演出] ジャコモ・プッチーニ：歌劇『ラ・ボエーム』～ミミとロドルフォの二重唱「愛らしい乙女よ」 [出演] アンナ・ネトレブコ（ミミ/ソプラノ） ラモン・ヴァルガス（ロドルフォ/テノール） [演出] ジュゼッペ・ヴェルディ：歌劇『リコレッタ』～マントヴァ公爵、マツダレーナ、シルダリコレッタの四重唱「別嬪さんよ、いつだったか・・・美しい恋の娘よ」 [出演] ラモン・ヴァルガス（マントヴァ公爵/テノール） エリーナ・ガランチャ（マツダレーナ/メゾ・ソプラノ） アンナ・ネトレブコ（シルダ/ソプラノ） リュドヴィク・テジエ（リコレッタ/バリトン） [演出] フランツ・レハール：喜歌劇『ジュディッタ』～ジュディッタのアリア「熱き口づけを」  [出演] アンナ・ネトレブコ（ジュディッタ/ソプラノ） [演出] ジョアキーン・ロッシェーニ：『踊り』 [出演] ラモン・ヴァルガス（テノール） [演出] ヘルベルト・チャビエール：サルスエラ『セペチアの娘たち』～とられぬ人の歌「わたしが愛を捧げたあのひとのことを思うたび」 [出演] エリーナ・ガランチャ（ルイザ/メゾ・ソプラノ） [演出] ジョルジュ・ビゼー：歌劇『カルメン』～エスカミーラのクープレ「闘牛士の歌」 [出演] リュドヴィク・テジエ（エスカミーラ/バリトン） [演出] ジュゼッペ・ヴェルディ：歌劇『椿姫』～乾杯の歌「友よ、さあ飲みあかそう」  [出演] アンナ・ネトレブコ（ソプラノ） エリーナ・ガランチャ（メゾ・ソプラノ） ラモン・ヴァルガス（テノール） リュドヴィク・テジエ（バリトン）  [指揮] マルコ・アルミアート [演奏] 南西ドイツ放送交響楽団</p>
協園彰 メゾ・ソプラノ・リサイタル	19,19,24 24,29,29 9	オペラ界の新星として、欧米屈指の歌手たちと肩を並べ、躍進する協園彰。日本が世界に誇るメゾ・ソプラノ歌手の才能と魅力が詰まった、貴重なリサイタル映像。	<p>欧米出身のトップ歌手たちと肩を並べ、イタリアを中心に目ざましい活躍ぶりを見せている協園彰。東京藝術大学を卒業後にイタリアに渡った協園は、ミラノ・スカー座研修所等で学んだのち、2014年、ジョアキーン・ロッシェーニの『フランスへの旅』でイタリアでのオペラ・デビューを果たしました。ロッシェーニの没後150年に当たる2018年には、彼の生地ペーザロにて、栄えある『ロッシェーニ・オペラ・フェスティバル』に出演。このとき『セビリアの理髪師』の主役を任された協園は、見事に期待に応え、高い歌唱技術と演技力を世界に知らしめました。</p> <p>番組は、2020年2月に東京で行ったリサイタル全編。主にオペラ歌手として躍進する実力派・協園の“もう一つの顔”が、珠玉の歌曲の数々を通して浮かび上がります。協園は、ヤマハホールへのぬくもりのある音響と親密な雰囲気を感じながら、ときに繊細に、ときにドラマティックに、各曲を歌い上げています。</p> <p>前半にフランス歌曲、後半にロッシェーニ作品を配したプログラムは、ヤマハホール10周年を記念して組まれたもの。伸びやかな高音域、自在で表情豊かな中音域、力強く劇的な低音域を誇る協園の美声は、とりわけ終曲のカンタータ『ジョヴァンナ・タルコ』で存分に発揮されており、まるでオペラを鑑賞しているような気分を味わうことができます。同曲やアンコール曲（協園の十八番『セビリアの理髪師』のアリア）で披露される『アジタ』(細かな音符から成るバッセージュを機敏に歌う高度な装飾歌唱)も必聴です。</p> <p>「ロッシェーニが理想としたであろうメゾ・ソプラノ/ダジリタという声種とクラリネットという楽器のあいだに、個人的に多くの共通点を見出して」と語る協園。プログラム後半ではエトトレ・ピアジ（クラリネット）が加わり、その超絶技巧と深い音色を通して、ロッシェーニ作品に新たな光を当てます。ピアニストとしてリサイタル全編を支えるミケーレ・テリアーの名演が、公演の完成度をいっそう高めています。</p> <p>[演奏] 協園彰（メゾ・ソプラノ） ミケーレ・テリアー（ピアノ） エトトレ・ピアジ（クラリネット）  [演出] 〈第1部〉レイナルド・アーン：クロリスにレイナルド・アーン：もし私の詩に翼があったならレイナルド・アーン：恋される人エクトル・ベルリオーズ：夏の夜 Op.7第1曲 ヴィラネル第2曲 番風の亡霊第3曲 入り江のほとりで（漁師の嘆き）第4曲 君なくして第5曲 墓地にて第6曲 未知なる島〈第2部〉ジョアキーン・ロッシェーニ：歌劇『マホメット2世』より「正義の神よ、これはなんと叫ぶ苦！」（エトトレ・ピアジ編） ジョアキーン・ロッシェーニ：歌劇『オテロ』より“柳の歌・祈り”（メゾ・ソプラノ、クラリネット、ピアノによるヤマハホール特別版）  ジョアキーン・ロッシェーニ：歌劇『セミラーミデ』より“ああ、絶えずあの日を思い出す”（エトトレ・ピアジ編） ジョアキーン・ロッシェーニ：カンタータ『ジョヴァンナ・タルコ』（ジャンヌ・タルコ）』『（アンコール）フランス・ブーランク：『メタモルフォーゼ』より“あなたはこんなふうだ” ジョアキーン・ロッシェーニ：歌劇『セビリアの理髪師』より“この歌声は” ジョルジュ・ビゼー：歌劇『カルメン』より“セギデーラ” フランシスコ・パブロ・ロステイ：別れの歌  [収録] 2020年2月19日ヤマハホール（東京） ■約1時間38分</p>
ドキュメンタリー&エンターテインメント			
オットー・クレンペラー「ラスト・コンサート」	10,10,14 14,26,26 6	20世紀の巨匠クレンペラーの最後のコンサート。そのリハーサルと本番の映像を中心に、そのキャリアと音楽作り、そして人間性を振り返る。	<p>1971年9月26日、ロンドンのロイヤル・フェスティバル・ホール。20世紀の巨匠と呼ばれる指揮者のひとり、オットー・クレンペラー（1885-1973）の最後のコンサートが行われました。そのリハーサル風景と本番の映像を中心に構成されたドキュメンタリー番組です。クレンペラーが初めてリハーサルと録音セッションの撮影を許可し、貴重な映像が残されました。元は1973年の番組ですが、今回は2015年に改めて構成されたバージョンをお届けします。</p> <p>クレンペラー自身のルーツを振り返る映像では、貴重な写真や音源、クレンペラー自身の声も入り、資料的価値も充実。ウィーンでの『エグモント』序曲のリハーサルで、弦に無理なボウイングを指示して無視されて怒るシーンなど、思わずニヤリとする場面も。当時を知る関係者や演奏者のインタビューも興味深いものです（後にフィルハーモニア管のポストを務めたウラディーミル・アシュクナージも登場）。何より圧巻なのは、やはりクレンペラーの最後の嬉しいリハーサル風景でしょう。</p> <p>オーケストラは、クレンペラー最後の手兵となったニュー・フィルハーモニア管（現フィルハーモニア管）で、メイン曲はブラームスの交響曲第3番。数日にわたるリハーサルでは、クレンペラーは厳しい表情のまま、短い言葉で指示するだけ。楽員の緊張感も大きく、マエストロの一挙手一投足まで反応しています。また、クレンペラーの指示による細かい変更や表情付けの書かれたスコアを表示しながら、該当箇所の場面を流してくれるのは貴重。番組最後は、ブラームスの第1楽章をノックアウトで、クレンペラーならではの遅いテンポによる重厚な演奏で、凄まじいまでの気魄あふれる姿と共に、重い感銘を受ける時間になることでしょう。</p> <p>[演出] ヨハネス・ブラームス：交響曲第3番 長調 Op.90より 他  [出演] オットー・クレンペラー（指揮） デヴィッド・ウィルトン（元フィルハーモニア管マネージングディレクター） ロッテ・クレンペラー（クレンペラーの娘） ウラディーミル・アシュクナージ（指揮） アンソニー・ボモント（音楽学者） 他  [演奏] オットー・クレンペラー（指揮） フィルハーモニア管弦楽団</p> <p>[制作] 2015年  [映像監督] フィロ・プレフスタイン</p>



番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
<p>オットー・クレンペラー「ロング・ジャーニー〜彼の生きた時代」</p>	<p>10,10,14 14,26,26</p>	<p>20世紀の巨匠クレンペラーの波乱に満ちた生涯を、数多くの音源、資料、コメントから振り返る「長い旅」は、20世紀の歴史の証言でもある。</p>	<p>20世紀の巨匠と呼ばれる指揮者のひとり、オットー・クレンペラー（1885-1973）。その「長い旅」のような生涯のポートレートであるばかりか、ヨーロッパとアメリカでの政治的および文化的な背景も浮かび上がらせる、重厚なドキュメンタリー番組です。全編にわたって細かく差し込まれる歴史的な映画、写真、音源などの豊富さも特筆ものです。</p> <p>クレンペラー自身の語りを中心に、20世紀音楽界全体の空気感まで伝える内容になっています。マーラーの交響曲第2番『復活』のリハーサル風景を挟みながら、マーラーとの出会いや人となり、往時の名指揮者や名歌手たちの思い出、シエーンベルク、R. シュトラウス、フイツナーといった作曲家たちの話だけでも見ごたえ十分。クレンペラーの演奏活動、社会情勢、ナチス・ドイツの出現、ベルリンのクロー・オペラでの活躍ぶりを振り返るなかで、1930年代にヒトラー体制で社会が大きく変わっていく様子も伝わってきます。ユダヤ人のクレンペラーはドイツを追われ、アメリカに渡って活躍し、多くの芸術家たちと交流も持ちましたが、離れた祖国のナチスによるユダヤ人虐殺は悲しい記憶となります。戦後はアメリカからヨーロッパに帰還し、フィルハーモニア管の常任指揮者として活躍、多くの録音も残しました。作曲家としての一面にも触れられるのは特に貴重でしょう。意義深い番組の最後は、引退宣言後の1971年9月26日、ニュー・フィルハーモニア管との最後の演奏会の曲目、ベートーヴェン『シテファン王』序曲のリハーサル風景で幕を閉じます。</p> <p>[演目] ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：劇音楽『シテファン王』Op.117より序曲</p> <p>[出演] オットー・クレンペラー（指揮） ロッテ・クレンペラー（クレンペラーの娘） ヴァルター・フォルゼンシュタイン（演出家） エルネスト・ブロッホ（作曲家） パウル・デッサウ（作曲家） 他</p> <p>[演奏] オットー・クレンペラー（指揮） フィルハーモニア管弦楽団、ニュー・フィルハーモニア管弦楽団</p> <p>[制作] 1985年 [映像監督] フィロ・プレフスタイン</p>
<p>ドキュメンタリー『失われた歌劇「マテイル・ディ・シャブラン」』</p>	<p>9,9,13,13,15,15,19,19</p>	<p>ミサの典礼文の一部分にC.S.バッハが作曲した楽曲を、バッハの世界的権威として知られるヘルムート・リリングが解説&amp;演奏したドキュメンタリー。</p>	<p>ベルリンで生まれ、1996年ロシーニ・オペラ・フェスティバルに23歳の若さで慧星の如く登場すると、その輝かしい高音と抜群の歌唱テクニックで、瞬刻間に世界の頂点に昇りつめたスーパーテノール、ファン・ディエゴ・フロレス。この番組は、彼のスター誕生となった公演のドキュメンタリー。</p> <p>ロシーニの歌劇『マテイル・ディ・シャブラン』は、1821年ローマでの初演では名ヴァイオリニスト、ニコロ・パガニーニが代役で指揮し、第2幕のホルンのソロも彼がヴィオラで代奏したことが知られています。アリアが4曲だけ、しかも技術的には困難を極めるといふ特殊事情もあって、記録では1892年を最後に、この1996年ロシーニ・オペラ・フェスティバルまで一度も上演されたことはありませんでした。つまりこの番組は、『マテイル・ディ・シャブラン』の104年ぶりの上演ドキュメントでもあるのです。</p> <p>今回の上演は、ローマ初演から数か月後に初演されたナポリ版を採用。番組では、詩人イジドローの言葉がナポリ方言になっていることなど、ローマ版とナポリ版のいくつかの違いも明らかにしています。フロレスはこの公演で主役の一人コラディーノを歌い、センセーショナルなデビューを飾りました。番組では、フロレスのピアノリハーサルやGPでの輝かしい歌唱とインタビューもお楽しみいただけます。さらに、批判校訂版を新たに編集したユルゲン・ゼルクによる解説は、この失われていた歌劇を知る上で必見の内容です。</p> <p>[出演]ファン・ディエゴ・フロレス（コラディーノ） エリザベス・フトラル（マテイル・ディ・シャブラン） バドシヤ・スベンス（エドアルド） ブルーノ・プラティコ（詩人イジドロー） ナターレ・デ・カロリス（ジナルド） ロベルト・フロンターリ（医師アリブランド） フランチェスカ・フランチ（アルコ伯爵夫人） ビエラリ（演出） イヴ・アベル（指揮） ユルゲン・ゼルク（解説/批判校訂） [監督]ロベルト・モレイラ[制作]1996年 ■字幕/約41分</p>
<p>ヤルヴィが語る「シューマン交響曲全集」</p>	<p>6,6,8,8,21,21,30,30</p>	<p>プレーメンのライブハウスで行われたヤルヴィとドイツ・カンマーフィルのシューマン交響曲ツィクルスの、リハーサルを交えながら4曲を解説するドキュメンタリー。</p>	<p>古典に新たな視点を与えるパーヴォ・ヤルヴィ指揮ドイツ・カンマーフィルが、ロックコンサートで使われるプレーメンの倉庫「ピール2（PIER2）」で開催したシューマン交響曲ツィクルス。この番組は、リハーサル映像を交えながら、ヤルヴィとオーケストラのメンバーが4曲の交響曲を1曲ずつ順番に解説したドキュメンタリーです。</p> <p>「これまでの巨匠は、伝統的な演奏をするために、シューマンの鋭すぎる角を丸く収めた。その結果、演奏は改善されたのかもしれないが、彼の特質である病的なエネルギーは失われてしまった」と語るヤルヴィ。彼の解釈は非常にユニークですが、そのコメントひとつひとつはとても説得力があります。実際にインサートされる演奏は、疾走するテンポや強烈なアクセントなど、実にスリリング。オーケストラの楽器奏者のコメントや彼らのパート演奏も面白い。</p> <p>「シューマンはピアノや室内楽は素晴らしいが交響曲は平凡」とよく言われますが、シューマンの交響曲の良さがあまりよくわからないという人に最適の番組です。</p> <p>[出演]パーヴォ・ヤルヴィ、ドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団[監督]クリスティアン・ベルガー[制作]2012年 ■字幕/約1時間39分</p>
<p>ラトル&amp;ベルリン・フィル「リヴィング・ウィズ・ベートーヴェン」</p>	<p>3,3,27,27,31,31</p>	<p>ラトルとベルリン・フィルが2015年10月に行った「ベートーヴェン交響曲全曲演奏会」の舞台裏に密着したドキュメンタリー。ラトルの楽曲解説とリハーサルシーンは必見。</p>	<p>世界最高峰のオーケストラとして名高いベルリン・フィルハーモニー管弦楽団と、2002年より首席指揮者兼芸術監督を務める指揮者サー・サイモン・ラトルによる2015年10月に行われた「ベートーヴェン交響曲全曲演奏会」の舞台裏に密着したドキュメンタリーです。</p> <p>見どころは、交響曲第1番と第3番、第6番、第7番、第9番についてのラトルの解説と、ベルリン・フィルメンバーのコメントの数々、そして普段は見ることができないリハーサルシーン。ベートーヴェンの交響曲を演奏する時はどのような気持ちで臨むのか。彼らは名曲をどのように解釈し表現しているのか。そのコメントの内容と彼らが本番に臨むまでの姿は、とても興味深いものがあります。</p> <p>何かに本気で取り組む人間たちの熱いドラマとしても見応え十分。「ベートーヴェン交響曲全曲演奏会」を楽しむ上で必見の番組です。</p> <p>[出演]サー・サイモン・ラトル、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、ダニエル・スタブラヴァ（第1コンサートマスター） ルートヴィヒ・グヴァント（第1首席チェロ） マシュー・マクドナルド（第1首席コントラバス） クリスティアン・シュターデルマン（2ndヴァイオリンリーダー） フィリップ・ボネン（2ndヴァイオリン） エヴァ＝マリア・トマジ（2ndヴァイオリン） ユリア・ガルデマン（ヴィオラ） ミハエル・ハーゼル（フルート） アンドレアス・オッテンザマー（首席クラリネット） ヴァルター・ザイファルト（クラリネット） ファーガス・マクウィリアム（ホルン） ヴィーランド・ヴェルツェル（ティンパニ） クリストフ・フランク（録音プロデューサー） [監督]ダニエル・フィンカー・ナゲル&amp;マグダレーナ・ツィエバ＝シュヴィント[制作]2015年 ■字幕/約46分</p>